

名古屋市
蓬左文庫

善本解題図録

第三集

名古屋市
蓬左文庫

善本解題図録

第三集

凡例

一、本書は、さきに刊行した第一・二集に続くもので、本文庫現藏の和書のうち、奈良・平安両時代に成った古典三〇種（うち、古写本二九・古活字版一）をおさめている。ただし、駿河御譲り本（徳川家康から譲られた書籍）に属するもの（「日本書紀」「続日本紀」「侍中群要」など）は、第一集に載せたので、これを除いた。

二、分類は、歴史・詩歌・物語に三大別し、伝記・地誌および辞典は歴史の部に、日記は物語の部にふくめた。各部における配列は、おおむね成立年代順による。（詩歌の部は、漢詩を先きに、和歌を後にした。）

なお「大鏡」と「今鏡」の二種は、史書としても重要であるが、ここでは「物語」の部に加えた。

三、記載事項は、おおむね、前例にならい、つきの順序にしたがつた。

書名・架蔵番号

著・編者名

巻・冊数

刊・写年代

内題・外題（題簽）

表丁・寸法(縦)

辺・界・行数(每半葉)・字数(毎行)・訓点

印記・伝来

奥書き・識語

内容・成立

著・編者略伝

諸本

参考

以上の項目のうち、欠けているものは、とくにことわらずに、次項を記した。

四、字体は、漢字・かな共に、現行のものに改めた。

五、本書は、昭和四十六年三月に刊行されたものの訂正再版である。

昭和五十五年三月

目

次

歴史

一、古事記	四
二、出雲國風土記	八
三、豊後國風土記	一〇
四、古語拾遺	一一
五、新撰姓氏錄	一四
六、日本文德天皇實錄	一六
七、日本三代實錄	一八
八、類聚国史	二〇
九、倭名類聚鈔	二三

詩歌

一〇、懷風藻	二四
一一、經國集	二三

物語

一二、菅家文草	二六
一三、本朝続文粹	二三
一四、万葉集	三三
一五、古今和歌集	二八
一六、拾遺和歌集	四〇
一七、金葉和歌集	四〇
一八、詞花和歌集	四〇
一九、三十六人家集	四〇
二〇、和漢朗詠集	四〇
二一、竹取物語	一〇
二二、伊勢物語	一〇
二三、土佐日記	一〇
二四、大和物語	一〇
二五、空穂物語	一〇
二六、落窓物語	一〇

二七、源氏物語	三三
二八、今昔物語集	三一
二九、大鏡（世継）	三〇
三〇、今鏡（続世継）	三一

一、古事記

八五四・一〇▽



太安万侶（太安麻呂）編・稻葉通邦校

三卷・三冊

寛政年間写・大須本

内題「古事記 上巻（中・下）」

外題（題簽）「古事記 本 上（中・下）」

袋綴じ・藍色紙表紙（原装）

二九・六×二一縞

無界・九行・一〇字（注双行）

奥書き

〔中巻〕 本曰 弘安四年五月六日以兼方宿祢本書写校

合畢

本曰 古記之当巻世間不流布鴨院御文庫之外無之云々

爰申請幕府之本写加書窓之中奴文之志神垂納文不
裁日本紀等事粗以見于此巻深秘箱底莫出〔外于時
時於秀倫之高嶋宮八年坐故從其國上幸之時
幸而於秀倫之高嶋宮八年坐故從其國上幸之時
岐國之多祁埋宮七年坐〔外于時亦從其國連上
岐國之多祁埋宮七年坐〔外于時亦從其國連上
而於笠紫之國田宮一年坐〔外于時而於阿
以音序二人作足一勝宮而獻大御變首其地處故
而於笠紫之國田宮一年坐〔外于時而於阿

文永第五之曆應鐘十七之日加校點錄旨趣而已

通議陰士卜 在判

古事記(下)

本云文永三年二月仲旬書寫畢

神祇權大副大中臣定世之

同六年九月廿九日於燈下一見畢 判

延治四年仲春廿七日後序中日

又一見畢寫執之至猶在袖革為之如何 判

備請親忠朝臣一本吉田大納言先房御被所
望之間依家若御命書寫進畢又一本書寫之

正二位行權大納言兼右近衛大將藤原朝臣在判
文永十年二月十日被召大殿御前御雜談之次此中卷
事取被出本自所持之由申入之條頗無念之間年來不
審之趣言上畢而同十二日以女房奉計伝管二品良賴
卿□下賜御本双家門之面目何事加旃哉神之冥助也
君之高恩也宜為後昆稽古之計即加校合同十四日朝

付二品返上畢

正議大夫卜 在判

祭主 在判

本云弘安五年九月一日申下一条殿御本書寫畢可秘藏

神祇權大副大中臣定世之

〔下卷〕本云文永三年二月仲旬書寫畢

同六年九月廿九日於燈下一見畢 判

建治四年仲春廿七日 彼岸中日

又一見畢宿執之至猶在神事為之如何 判

借請親忠朝臣一本吉田大納言定房卿被所望
之間依家若御命書寫進畢又一本書寫之止之

「古事記」は、國の初めから七世紀までのできごと
を、多くの神話や伝説などをまじえて記した最古の史
書で、わが古代人の知識の集成といわれ、最も基本的
な古典のひとつであることはいうまでもない。成立は
和銅五年（七一二）で、上巻が神話時代、中巻が神武
—応神天皇、下巻が仁德—推古天皇（六一八）までと
なっている。

編者の太安万侶（おおノやすまる。？—七二三）は
奈良時代初期の代表的な学者で、舍人（とねり）。皇族
や貴族に仕える雑司（稗田阿礼が暗誦する古い事がら
を記録して、この書を作ったといわれるが、もちろん

單なる思いつきや興味からではなく、古代國家ないし
天皇制確立の過程における政治的意図にもとづくこと
は明らかである。文章は、漢文と、漢字による国語と
が混用されており、編者の苦心がうかがわれる。安万
侶はのちに「日本書紀」の編集にもたずさわったよう
だが、漢文で書かれた「書紀」よりも、国語をまじえ
た「古事記」の方に、すぐれた文学的描写が多い。

「古事記」の伝本は、写本・刊本ともにおびただし
いが、室町時代以前の古いものはとぼしく、名古屋市
真福寺宝生院のいわゆる大須本（室町初期写・国宝）
が、現存最古の完本として名高い。蓬左文庫本は尾張
の学者稻葉通邦が、藩主（九世宗睦）の命によって、
大須本に校訂を加え、それを精写したもので、信頼し
うる証本の一つである。その識語は、大須本の由来や
価値などを簡潔に述べたもので「——此書、疑似の
字、最も多し、然りといえども、諸流本を校し、俗説
の弊を洗うに足る、証本というべし、是をもって取つ

て繕写し、「云々」とある。(写真版参照)

新刊古事記述言
古事記者、和綱忠太郎臣安麻呂本

勅撰錄得田阿礼所誦也其所誦即

天武天皇之勅諭而狩討處定實也臣嘉證故

安閑天皇崩歿

宣化欽明二朝不注前及山後而皇子繼尊

天皇御玉接此觀之并據互

宣化欽明丙朔之孫父其紀事止葉於

顯宗仁賢二帝前可證也紀曰推古天皇二十

八年上宮太子多岐大臣義錄天皇起及庶本

▽参考 (1) 稲葉通邦(一七四四—一八〇一)は通称を喜蔵と云い、食禄は二百石、儒学・故実・国学などにくわしく、安永・天明・寛政の間、博識と励精とで知られた。ちなみに、この時代の名古屋は、文教の進展がいちじるしく、河村秀穎・横井也有・神村正隣・石川香山・岡田新川・礪谷滄洲・内藤東甫などを輩出し、天明三年には藩校明倫堂も開かれた。

尾張國大須賓生院藏古事記者卷尾書于
紹中云執筆金剛資賢瑜俗老三十八歲其
下卷云二十九歲查照之同寺之藏秘藏寶
鑰卷尾章書云應安第三天十一月賢瑜二
十七歲據此觀之是書有應安四五兩年神宮
書可謂有年也先是賓生院有嚴譽受神宮
神典之名捨其藏神祇木源僧俗諱與應安
年書寫以書寫同時觀之書寫之因蓋同故
也或出于神宮之本耶抑又舊黃之陰致真
功耶此書疑似之字最矣雖然校語流本
足洗俗說之弊可謂謬本也是以取而存之
并附于館以待圖用云爾 補遺道邦書

稻葉通邦識語

もちい、たびたび、蔵書の整理や補修を行なつた。藩は、家康の意志をついで、この文庫の保護に意を

古事記述言

本文庫には、右のほか、塙保己一の校本「古事記」(写本・三巻三冊・訓点付き)がある。

一一、出雲國風土記

八一〇八・三六▽

一冊

江戸初期写

内題「出雲國風土記」

外題 同 上（徳川義直筆・金泥）

袋綴じ・藍色紙表紙（原装）

二九・七×二一〇・七縁

無界・八行（注双行）

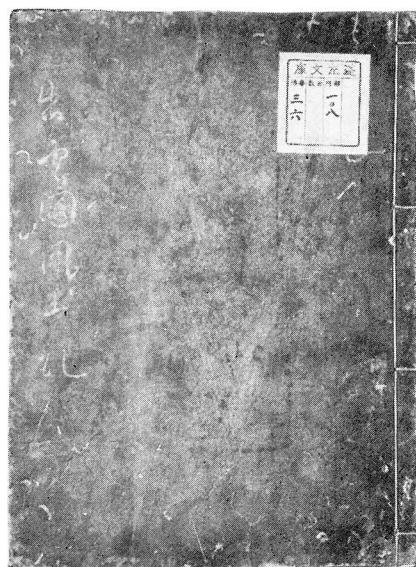
「御本」印記（徳川義直の蔵書印）

「古事記」や「日本書紀」の成立と前後して、和銅六年（七一三）大和朝廷は「風土記」（ふどき）すな

わち地誌の撰進を日本六十余国に命じ、それらの多くは、奈良時代後期に成ったと考えられる。ただし、現存するものは、出雲・豊後・肥前・播磨・常陸の五カ国にすぎず、完全に伝わったのは、出雲だけである。

内容は、出雲の郡や郷ごとに、地名・伝説・交通に関するなどが記され、古代国家群の中でも特に重要な出雲の地誌だけに、基本史料のひとつとして高い価値をもっている。

本書の伝本はかなり多いが、古いものはきわめて少なく、蓬左文庫本は、細川家本・倉野氏本などと共に現存最古かつ最良の写本の一種といわれる。



参考

①島根県日御碕（ひのみさき）神社に、徳川義直筆の題簽および別記のような識語をもつ一本がある。蓬左本とほとんど同文（ただし、訓点あり）で、その写しと思われる。

鳥取之樓高見海東之類良繁々悉
不陳然不復上科奉授械以成記趣
所收乎出雲者八木水臣津野金詔
八雲立詔之故云

八雲立詔

合神社參伯狹拾狹列

皇孫拾拾肆所 在神祇宮

貳伯壹拾伍所 不在神祇宮

出 雲 国 風 土 記

日本風土記六十六卷今纔存出雲國記一冊而已是神國之徵兆也依為當國之靈物奉寄進日御崎社者也

寛永十一年秋七月日

從二位行權大納言源朝臣義直 花押

②日御碕神社は、島根半島の西端に当り、出雲大社の西北およそ六キロメートルの地点にある。「風土記」には「美佐伎神社」とある古い社で、祭神は日神および素盞鳴尊と伝えられる。伊勢神宮が東に海をひかえているのに対し、この宮は、西海に臨むため「日沈宮」（日沈みの宮）とも呼ばれる。

玖郡御陸拾壹	里百廿九	餘戶肆家陸神戸添里一
意宇郡御壹拾	里廿	餘戶壹肆家參神戸參添里一
鳴根郡御捌	里廿五	餘戶壹肆家壹
秋鹿郡御肆	里一十九	神戸壹
補綾郡御肆	里千二	餘戶壹神戸壹
出雲郡御捌	里木二	神戸壹
神門郡御捌	里木二	餘戶壹肆家貳神戸壹
飯石郡御添	里一十九	

三、 豊後国風土記

八一〇八・三七▽

一冊・江戸初期写

内題「風土記 豊後國」 外題「豊後風土記」

袋綴じ・薄茶色紙表紙（原装）

三〇・八×二二二 線 無界・九行（注双行）

奥書き（一一ページ下段写真版）

豊後風土記

唐文元選
五七
一八

風土記 豊後國

郡 括取（三百三十里驛政取並小烽伍前並下）
寺 藏所（尼寺）
豐後國者本興豐前國合爲一國者者繩向日
代官御宇 大足赤天皇 詔 豊國直等
祖定名手遣治豐國往到豐前國仲津郡中
住村于時日晚偏宿明日昧爽忽有白
鳥從北飛來翔集此村竟名手即勸僕荷
遺者其鳥化爲鮮片時之間芋草數

現存する「五風土記」のひとつ。（前章参照）

豊後国（大分県）は、古くから開け、史跡や古文化財にも富むが、本書には、景行天皇とその土蜘蛛（土着民）征服に関する記事の多いのが特色である。本書もまた古写本にとほしいが、これは、文禄四年（一五九五）梵舜奥書き本を写したもの。梵舜（神龍院）は京都の国学者ト部兼見の弟で、神・儒・仏の三道に通じ家康に用いられて、その文教事業に参与した。

予許株花葉冬宋葉名手見之為黑歡喜
云化生之草未曾有見實至德及乾坤之
瑞既而參上朝奉林葵已上

本開

天皇於此歡喜之有即勒名手云天之瑞物

地之豐草汝之治園可謂豐園重賜姓曰豐國
直因曰豐園後今西園次豐後國為名內郡
卿位所里一驛重誠肯經向日代官御宇大足
彦天皇征代珠唐贈於凱旋之時發送後園某

豐後國風土記 奧書

字本云

永仁五年歲月十四日書字畢

同十九日一校了

文稿四
卷年曆月三日書字校合等了

梵宗判

行宮幸於此郡有神名曰清媛化而寫金迎
舞中國消息因斯曰久津媛之郡今謂曰田郡
者訛也

石井鄉

在郡南

昔者此村有土蜘蛛之堡不用石築以土固期

名曰魚石堡後人謂石井鄉誤也鄉中有河名
曰阿彌川其源出肥後國阿彌郡少國之峯
流到此鄉即通珠川會為一川名曰田川幸莫
多遂過築前築後等國入於西海

写本云

永仁五年歲月十四日書字畢

同十九日一校了

文稿四
乙未年歲月三日書字校合等了

梵舜判

四、古語拾遺

△一〇九・七▽

齋部広成編

江戸初期写・一冊

内題「古語拾遺一卷」

題簽「古語拾遺」

袋綴じ・青色紙表紙

三〇・七×二一・九縁

四周双辺・有界・八行・一九字（注双行）・訓点付き

「御本」印記

奥書き

嘉禄元年二月廿三日以左京大夫長倫朝臣本書写畢

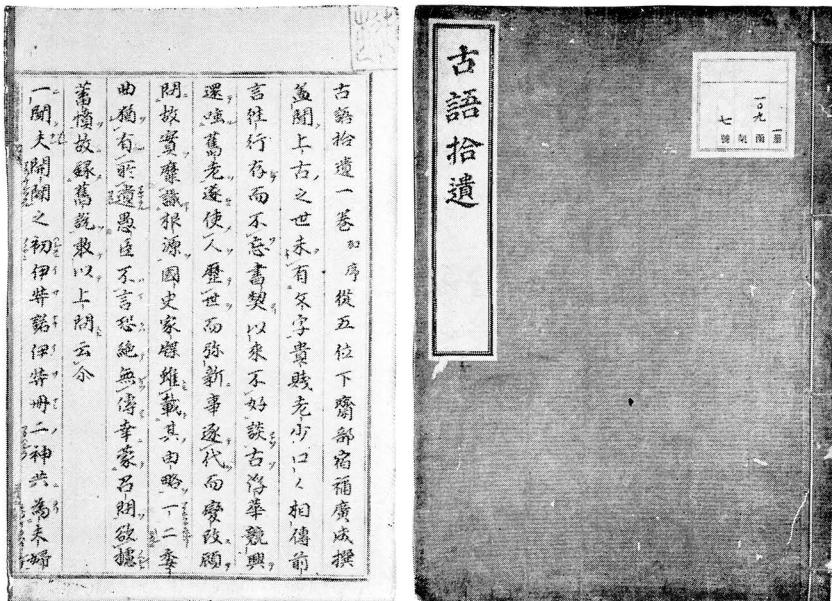
奥記云保安五年閏二月四日丙申見令主神頭師遠朝臣
本畢猶有詫謬尋訪証本可決真偽
史部侍郎在判
蓄稿故錄舊說散以上聞云余

一聞夫開湖之初伊華諾伊特母二神共為未解

翌日校点畢

祠部員外郎判

古語拾遺



比較証本畢 同二廿六

藏人神祇權少副ト部朝臣兼致

累祖相伝本聊示靈異輒難披閱仍細細為了見以他本所

書写也

ト 兼直

神祇少副兼侍從ト部朝臣兼滿

喜（嘉）元四年八月廿一日取目錄訖凡此書朝夕所練
習也

祠部員外郎ト兼夏

延久元年申歲四月十七日修補之雖片時不可出他處仍

余本一兩所令用意者也 神祇大副ト部兼豊

同六月十一日加首書訖

ト部 判

右一冊者於永昌坊披見次令書写畢

明應元年七月中旬 城外禾水耳順智祐性本如此

至德三年六月二日一見畢 従三位ト部朝臣兼熙

應安六年兼熙授申二条故殿下御名良畢

應永四年四月十五日千度御祓勤修之中此卷読合之畢

神祇大副兼治部卿右馬頭ト部朝臣兼敦

康正三年二月十三日一見之訖

正三位行兼侍從神祇權大副臣ト部朝臣兼名

文明元年六月廿七日 一見畢

正四位上行神祇權大副兼侍從ト部朝臣兼俱

文明九年正月十二日

「古語拾遺」は、古い名族のひとつである斎部（いんべ・忌部）氏を中心には、國初から文武天皇まで（七〇七）の事蹟を記したもので、大同二年（八〇七・平安初期）に成ったとされている。

斎部氏は、中臣氏（のちの藤原氏）とともに祭祀をつかさどる有力な部族であったが、天皇家を利用する

〔次に裏書（日本後紀第十四）あり、略す〕

文明十九年二月上旬課或人書寫焉同五月廿五日為備

後代之証本以累家之秘説加朱墨兩点読合之畢

藏人神祇少副ト部朝臣兼致

中臣氏におされて衰えたので、家運挽回のため、先祖

の功業をあげて朝廷に訴えたのが本書である。その記

事の中には、「古事記」や「日本書紀」の欠を補うも

のもあって、両書に次ぐ重要な史料といわれる。

本書は、前田家尊經閣本（鎌倉時代写・重文）はじ

め、古写の伝本が多く、江戸時代に入ると、初・中・

末期にわたって、たびたび刊行された。蓬左本は、元和・寛永ごろの写本である。

五、新撰姓氏錄

八一〇五・五三▽

万多親王・藤原緒嗣等編

三冊

江戸初期写

外題（題簽）「敬姓氏錄 上（中・下）」

袋綴じ・絹色紙表紙

二六・九×一九・七^横

無界・一〇行（注双行）・朱点入り（下巻のみ）

「尾府内庫図書」印記

本文庫には、ほかに名古屋の儒者中村習斎の旧蔵にかかる一本（江戸初期刊・「尾張中村書庫」印記・一冊△中・二〇六▽）がある。前記の古写本と同系統のもので、奥書きや裏書きなどに省略があるが、本文には、ほとんど差がない。

略して「姓氏錄」（しょうじろく）ともいう。古代氏族の出自・家系を記した姓氏台帳で、弘仁六年（八一五）に成った。内容は、上古から平安初期にいたる諸氏族を皇別（天皇の子孫）・神別（皇族以外の諸神の系統）・蕃別（中国や朝鮮からの渡来者）・未定雜

五三號	五 四	一〇五	公
-----	--------	-----	---

故姓氏錄

上

饒速日尊

天香詔山命

尾張宿祢

火羽余二十世孫阿東祐連之後也

尾張連

尾張宿祢同祖火羽余男天賀吉山命之後也

伊福祐宿祢

尾張連同祖火羽余之後也

新 撰 姓 氏 錄

姓の四部に分けて挙げている。原本は三〇巻（ほかに目録一巻）といわれるが、いま伝わる諸本は、みな略本である。

編者の万多（まんだ）親王は桓武天皇の第五子、藤原緒嗣（おつぐ）は藤原四家のうちの式家に属し、平安初期に活躍した政治家のひとりで、のちに左大臣に進んだ。

蓬左本「姓氏錄」は、序文を欠き、本文も、一般のものに比較すると、かなりの異同を見いだす。題簽にも「敬公」（徳川義直）の二字が冠せられているところから、義直とその側近の学者によつて、改編されたともみられる。

ちなみに、義直は、林羅山・堀杏庵などに学んで、神・儒両道および歴史にくわしく、その代表的編著として「類聚日本紀」一七四巻・「神祇宝典」一〇巻がある。

六、日本文德天皇実錄

八一〇五・三八▽

藤原基経等編

一〇卷・四冊

江戸初期写

内題「日本文德天皇実錄」

袋綴じ・濃糺色紙表紙

三一・四×二二・八

双边・有界・八行・一九字

寛永一一年角倉平次献上本

日本文德天皇實錄卷第一
起嘉祥三年三月盡
六月
右大臣正二位藤原朝臣基綱等奉
文德天皇舞道康 仁明天皇長子也母藤原氏

贈太政大臣正一位冬嗣之女也年十六承和九年八月立為皇太子嘉祥三年三月己亥

仁明皇帝崩於清涼殿于時皇太子下殿御宣陽殿東庭休廬左右大臣率諸卿及少納言左右直衛少將等獻天子神靈寶輦符帛鈴印等頌

「六国史」（「日本書紀」を第一号とする六部の正史）の第五にあたる。略して「文德実錄」（もんとくじつろく）とも云い、文德天皇在位九年間（八五〇—八五八）の事蹟を記したもの。平安初期における根本史料のひとつで、政治や法制に関する記事が比較的少

く、人物の伝記などにくわしいことが特色とされる。

編者の藤原基経は、太政大臣良房の養子となつてその後をつぎ、光孝・宇多の両天皇を立てて最初の関白職に補された。藤原氏独裁の基盤は、かれの時に定まつたといわれる。

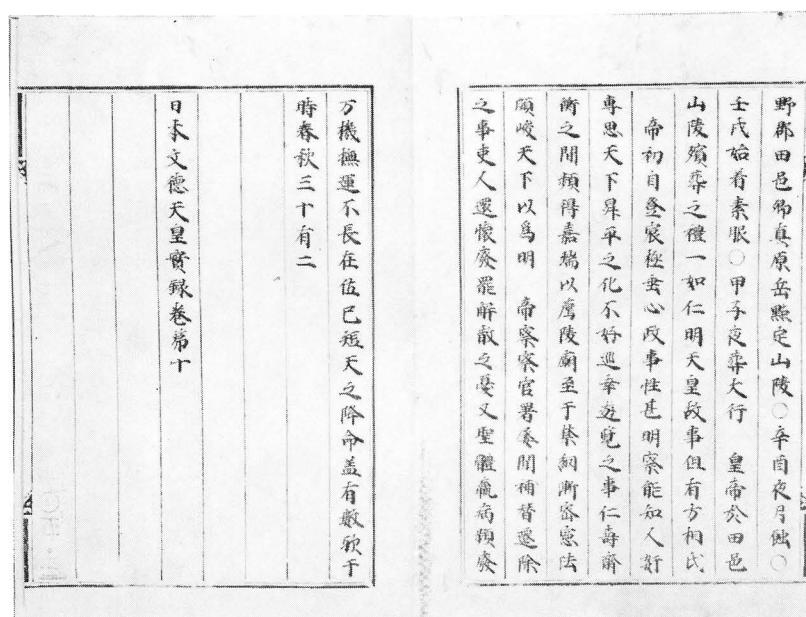
この本は、角倉平次（すみのくら・へいじ。素庵の次男）が尾張家に献じたもので、活字版用の罫紙に、楷書で清書してある。

▽参考

角倉（吉田）氏は江戸初期の代表的な事業家で、家康にも重く用いられ、貿易・土木などの方面に活躍した。（京都の高瀬川を開いたのはその一例）一

族はおおむね学芸にすぐれ、とくに与一（素庵）は、

当時、一流の文化人で、本阿弥光悦らと、有名な嵯峨本（平がなを主とする木活字を用いた優雅な版本）を刊行した。本文庫には、このほかにも、与一や平次の献上本がすくなくない。



從五位上行勳爵由次官參外記臣大藏輔臣善行

七、日本三代実録

八一〇五・三九▽

藤原時平等編

五〇卷・一三冊

江戸初期写

内題「日本三代実録」

袋綴じ・濃紺色紙表紙

三一・四×二二・八葉

双辺・有界・八行・一九字

寛永一一年角倉平次献上本

太上天皇

日本三代實錄卷第一
起天安二年八月盡十二月

左大臣後藤兼定等贈人相臣藤原朝臣持平等奉勅撰

天皇御准仁 文德天皇之第四子也母太皇太后藤原氏

大政大臣贈正一位良房卿臣之女也嘉祥三年歲在庚午三月二十五日癸卯生天皇

於大政大臣東宮一條第十一月二十五日戊戌立為皇太子于時乾首九月也先是有童謡者大

「六国史」の最後の一編で、清和・陽成・光孝三代の治世三十年間（八五八—八八七）の記事をおさめ、「文德実録」に續く平安初期の基本史料として重要なものの。記述のくわしいことは、「六国史」の中で隨一といわれる。官撰の歴史が本書をもつて終わったの

は、まもなく、遣唐使が廃止され、中国との公式の交通が絶えたことが、大きな理由であろう。

編者の藤原時平は、基經の長子で、ライバルの菅原道真を左遷し、藤原政権をさらに強化した人物。ただし、編集の実務にあたったのは、道真や大藏善行など当時の有名な学者たちである。

なお、この本も前出の「文徳実録」と同じく、角倉平次が献じたもので、筆跡・料紙・装丁なども、全くひとしい姉妹本である。

▽参考

「三代実録」以後は、私撰の歴史が、かなを主とした和文によって、物語り風に書きあらわされる。

後述の「大鏡」がその代表作で、いわゆる「歴史物語」という新しい形式が平安後期に生まれる。(六

国史が、すべて漢文で記されていることは、いうまでもない。)

日本三代實錄卷第五十	公民眾聞食宣隨法不可有岐政止定省親王 宇立而皇太子止定賜布故此之秋假天百官人 等仕奉 _上 天皇勅旨乎衆聞食止宜是日天 皇崩於仁壽殿平時春秋五十八	磐石於漢典占家廉之 進姬危妨其運第十七息定省年二十一枝侍朕躬 未曾出閨寢仁孝悌朕承鍾粹前被泥昆弟之厲 行處編一戶令欲傳祖宗之駿命何茲藉仕苟不 為身誰嫌及衍其荆臣壯以列親王心星宜有帝 子之名庶安息辭天孫之号○二十六日丁卯 天皇聖體永樂是日立第十七皇季辭為皇太子策 日天皇詔旨勅命 _中 親王諸臣百官人等天下
------------	--	---

神祇部

左文庫
一〇五
四九六

類聚國史 一

類聚國史第百九十

風俗部

國標 雜人叙位附出

叛政人僧麻戒人附出

倭因叙位入道附出

多禍 南鳴
蝦夷入道易物附出

袋綴じ・薄茶色紙表紙(雲竜)

二六・九×二〇・三

無界・八行・一八字(注双行)

八、類聚國史

八一〇五・四九▽

菅原道真編

六八卷・六四冊

江戸初期写(享和二年、河村益根本による補写あり)

内題「類聚國史 卷一(一百九十九)」

外題「同 上 一(一百九十九)」

「六国史」中の記事を、神祇・帝王・後宮・人・歳時・音楽・賞宴・政理・刑法・職官・文・田地・祥瑞・災異・仏道・風俗・殊俗などに部類わけしたもの。
要するに、六国史を再編集した書であるが、編者独自の分類法が用いられ、史実の検出に利便を与えるとと
應神天皇十九年十月戊戌朔辛吉野宮
隼人叙位附出
清寧天皇四年八月癸丑
欽明天皇元年三月庚辰

類聚國史卷第八十七

刑法部一

新例 配流遠近附新案

配流

元明天皇和銅五年五月乙酉詔祐司主典
以上并諸國朝集使等日削法以來年月深
久未熟集令多有過失自今以後若有違令
者准其犯依律科斬々々聖武皇帝神龜二

類聚國史

もに、現存する「六国史」の欠文をおぎない、字句を
ただすにも役立つ有益な史料である。

本書は、はじめ、二〇〇巻あったが、追々散逸して
現在は、およそ三分の一の六〇余巻を残すにすぎな
い。蓬左本は、比較的よくそろっている方で、六八巻
を数える。その巻数はつきの通りで、別に重複本二巻
(一四七・一六五)をふくむ。

- 一・二・三・四・五・八・九・一〇・一一・一四・
一五・一六・一九・二五・二八・三一・三二・三三
・三四・三五・三六・四〇・五四・六一・六六・七
一・七二・七三・七四・七五・七七・七八・七九・
八〇・八三・八四・八六・八七・八八・八九・九九
・一〇一・一〇七・一一〇・一一一・一二二・一一
三・一一四・一一五・一二六・一四七・一五九・一
六五・一七一・一七三・一七七・一七八・一七九・
一八〇・一八二・一八五・一八六・一八七・一八九・
・一九〇・一九三・一九四・一九九。

射入唐廻使及唐入奏唐國新器樂柳槍五位已上
賜祿有差

廢帝天平寶字五年八月甲子高野天皇及帝幸藥
師寺禮佛奏吳樂於庭施綿二十匹還奉
高野天皇天平神護二年十月壬寅奏請閼寺毗沙
門像所現舍利於法花寺云云詔百官主典已上禮
拜詔曰云々癸卯授從五位下參事充瓊從五
位上正六位上表嘗卿從六位上皇甫申東刺史用昇
女並從五位下以舍利之會奏唐樂也

神護景雲元年十月庚子大極殿崩僧六百轉讀大

九、倭名類聚鈔

八一〇五・一二一

源順著

二〇卷・一〇冊

元和年間刊（古活字版）

内題「倭名類聚鈔 卷第一（一二十）」

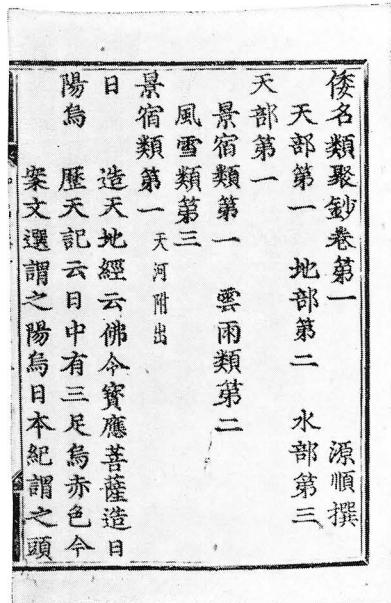
外題「倭名鈔 一（一十）」

袋綴じ・丹色紙表紙（原装）

二八・二×二〇・一縞

双边・無界・九行・一六字

「御本」印記



平安前期に成った日本最初の百科辞典。略して「倭名抄」（わみようしょう）という。万物を、天・地・水・歳事・鬼神・人倫・形体・術芸・職官・国郡・居処・船・車・牛馬・宝貨・香薬・燈火・布帛・裝束・居

日 造天地經云佛今寶應菩薩造日
陽烏 歷天記云日中有三足烏赤色今
案文選謂之陽烏日本紀謂之頭

倭名類聚鈔卷第三

源順撰

形體部第八

耳目類第三十一

頭面類第三十二

毛髮類第三十三

鼻口類第三十四

筋骨類第三十五

身體類第三十六

藏府類第三十七

肌肉類第三十八

薰垂類第三十九

手足類第三十

瘡類第四十一

頭面類第三十

病類第四十

英虞郡

甲賀

名錐

船越

道浮

芳草

二色

餘戸

神戸

尾張國第七十六

中島郡

美和

神戸

拜師

小塞

木乎世

三宅

西部

阿加
奈倍

石作

久利

豆

日野

川崎

海部郡

新屋

中島

津積

志摩

伊福

倭名類聚鈔

調度・器皿・飲食・稻穀・菓瓜・菜蔬・羽族・毛群・鱗介・草木などに大別し、さらに細分して、それぞれの漢名に、万葉がなの訓（よみ）や注を付けたもの。

古代の事物に關する資料としてたいへん重要で、今でも大いに利用されている。本書は、はじめは一〇巻、のちに増補されて二〇巻となつた。この「倭名鈔」には、元和三年（一六一三）の題言があり、元和古活字版として名高い。

著者の源順（みなもと）したがう。九一一九八三）は、平安前期の有名な学者で、詩歌の道にもすぐれ、いわゆる「梨壺の五歌仙」のひとりに数えられる。家集に「源順集」があり、また「竹取物語」や「空穂物語」などの著者にも擬せられている。学才がゆたかであるにもかかわらず、朝廷では、あまり重く用いられず、地方長官（能登守）程度にとどまつた。しかし、その学芸方面的業績は、高く評価されている。

一〇、懷風藻

八一〇八・五▽

一卷・一冊

江戸初期写

内題「懷風藻」

外題 同上 (徳川義直筆・金泥)

袋綴じ・藍色紙表紙 (原装)

二七・七×二〇・三葉

無界・九行

「御本」印記

奥書き

長久二年冬十一月二十八日燈下書之

古人三余今日得二者也

文章生惟宗孝言

譯田邊後谷刑木山之風人趙齊魯之學是子
之時天造草創人文未作至故神后位政而帝
家凡百事入開啓龍龜於馬廄高簷上長圓身
母於烏文王仁始重委於鵝嶺亦終數教於
聖德太子設齋分官私別禮義成而專宗釋
教末還宿草及至漢海先帝之愛命恩休聞
章業弘開皇猷道裕乾坤昭光宇宙既而以為



物外窮塵遠山中
幽隱抱南浦
移丹風琴洞躍
錦鱗月後飄香春
風前松聲深閑仁
別山路風智貴河

五言月夜無可道一絕

雲飛低玉柯
月上勸金波
落照曾王危流光
微

懷風藻

長久二年冬十月三十日
自繪下書之
正章主風藻

此書蓮華玉院空藏之本也
久埋塵埃人不知
之良水九年之北
微出之上古之風味尤有興
仍令書名之

近江朝から奈良朝にかけて、およそ八〇年間にわける皇族・貴族・僧侶などの作品一二〇編をおさめており、漢詩集としてはわが国で最も古い。この時代には周知のように、唐の文化がさかんに流入し、漢詩文も、上流階級にはかなり普及して、その教養の基本となつた。ただし、それはほとんど男性に限られていたようで、女性の作品は、まだ、本集には見られない。

日本古来の詩歌を集めた「万葉集」には質・量ともに及ばざること遠いが、作品ごとに作者の略伝が記され、また、儒・仏・道三教の影響がたどれるなどの点から、古代における文化史ないし政治史料として、独自の価値をもつてゐる。本集の中の代表作のひとつとして、大津皇子（天武天皇の第三子。つぎに持統天皇が立つとき、謀反のうたがいで、死罪に処せられた）の五言臨終一絶をあげる。

金鳥臨_ニ西舍_一 鼓声催_ニ短命_一
泉路無_ニ賓主_一 此夕離_レ家向

ちなみに、大津皇子の歌は「万葉集」にも入っており、その一首「ももづたふいわれの池に鳴く鴨を今日

のみ見てや雲隠りなむ」は、やはり辞世の作である。

本書の成立は、序文によれば、天平勝宝三年（七五

一）とあるが、編者については、淡海三船・石上宅嗣・葛井広成などの諸説があつて、一定しない。

本書は伝本が比較的的くない。近世以前の古写本は

とくにめずらしく、蓬左本は、内閣文庫本などとともに、最善のものに属する。この本の序文には、堀杏庵（一五八五—一六四二）が加えたらしい頭注や訓点がある。筆跡は、前出の「出雲国風土記」と同じで、外

題もまた徳川義直の筆である。杏庵は藤原惺窓の高弟

で、林道春・那波道円・松永尺五らと同門の大儒であ

る。はじめ安芸の浅野家に仕えたが、元和八年、義直

に懇望されて、その侍講となり、多くの著述や育英によつて、尾張文教の基礎づくりに貢献した。

一一、経国集

八一〇八・九▽

良岑（峰）安世等編

六巻・六冊（残欠）

江戸初期写

内題「経国集卷第一・十・十一・十三・十四・二十」

外題「経国集」（徳川義直筆・金泥）

袋綴じ・紺色紙表紙（原装）

三〇×二一
縦

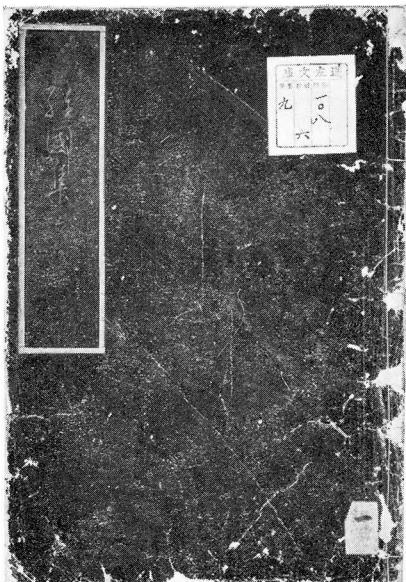
無界・九行・朱点付き

「御本」印記

奥書き（第一巻）

康永癸未之歳初秋上旬之候於西郊幽居粗校讎之点画之誤尚以有疑此書蓮華王院宝藏之本也近古以来無握翫之人金玉之声久埋塵埃之底卷軸多一紛先所遺僅上

帙二卷 第一下帙五卷一二三四乞上古之篇什興味尤深
第十第廿一仍軸々相分書写之畢



集 経

經國集卷第十四 時十三 雜錄四
五言奉試詠天一首 與參守
列位三光轉固時萬物通窮陰終朝北陽煦早
禽春曉日望唐帝殺雲觀樂公懲之秋天尚未
班与奈雄
五言奉試詠梁得塵字一首 南弘貞
鳳閣將成藏龍棲結舞衣翻華日數每起妙秋
塵帶紫朝光 含丹曉色新猶為廊廟齡長奉聖
君宸

平安初期に成った勅撰の漢詩文集で、文武天皇の慶雲四年（七〇七）から淳和天皇の天長四年（八二七）に至る一二〇年間の作品を収めたもの。作者はおよそ一八〇人、詩文の数は一〇二三編（うち、詩九一七・賦一七・序五一・第三八）に及び、前出の「懷風藻」に比して、そのスケールの大きさがわかる。これより少し前の弘仁年間に、同じく勅撰の漢詩集「文華秀麗集」や「凌雲集」が編まれており、平安初期における漢文学の隆盛を思わせる。本書は、その編集方法も、中国古代の代表的な詩文集「文選」（もんせん）にならって、よく整っている。なお、わが国の漢文学には、歴史的に、三つのピークがあつた。第一は平安初期、第二は鎌倉末期—室町中期のいわゆる五山文学時代、第三は江戸後期である。

編者の良岑安世（七八五—八三〇）は、桓武天皇の

皇子で、平安時代初頭の学者・文人として著名。ほか

に、滋野貞主・南淵弘貞・菅原清公・安野文継・安倍

吉人など、当時の学者群が協力しており、序文は滋野

貞主が書いた。

本書は、はじめ二〇巻あったが、大部分は散逸し、

一・一〇・一一・一三・一四・二〇の六巻を残すにす

ぎない。幸いに、首・尾の両巻を存しているので、序

文などにより、その原形を、いちおう、知ることがで
きる。

本書の伝本もまた少く、内閣文庫・東京大学・静嘉

堂文庫・尊経閣などに六巻本がみられるが、そのほか

は、たいてい、二一五巻の零本のようである。蓬左本

は、江戸初期の精写本で、「懷風藻」と同じく、序文

には訓点が付され、また、本文には朱の句読点がほど

こされている。

一二、菅家文草

八一〇八・二▽

菅原道真著

一三巻・五冊

慶長年間写

内題「菅家文草卷第一（一卷十三）」

外題「同上一（一五）」

袋綴じ・黄褐色紙表紙

三一・二×二三・一縦

双边・有界・八行・一九字（注双边）

「尾陽内庫」印記・寛永一一年角倉平次献上本

平安前期の詩人・学者また政治家として有名な菅原道真（八四五—九〇三）の漢詩文集。その内容は、詩が四六八、散文（賦・銘・贊・祭文・記・序・議・策問・対策・詔勅・奏状・表・願文など）が一五九編に

詩

月夜見梅花

齊衡三年乙亥于時年十一歲

君令田進士試之予留言詩故

月題
如曉雪梅花似照星可憐金鏡轉庭上玉房

載舊

日

臘月獨興

天安二年丁酉年十有四

玄冬律迫正堪嗟還喜向春不敢貽欲盡寒光休

および、個人の集としては空前の量といえる。質においても、また、すぐれたものが多い。とくに詩作では、高い知性とゆたかな感受性を示し、近代的な抒情詩や象徴詩のおもむきを呈するものがある。総じて憂愁のかけが深いのは、唐詩の影響もあろうが、内省的な性格や病弱の体質に加えて、当時の政治・社会状勢などにもとづくものと思われる。

路邊殘菊

菊過三重陽似失時相憐好是馬行遲

金精未滅薰香在欲把還羞路拾遺

不睡（冬夜九詠のうち）

不レ睡騰々送三五更一苦思吾宅在東京一

竹林花苑今忘却

聞道外孫七月生

さて、道真は、祖父清公・父是善と、三代にわたり学芸をもつて聞こえたが、道真にいたり、宇多天皇の信任を受けて政治に参与し、右大臣に進んだ。これがわざわいとなつて藤原氏から排撃され、悲惨な晩年を

葉問

叙流傳

聞聞而不可索者其外萬八千脊雖以可得知者
其間百七十年為樞為器雖在自然之必然由運
由人非無見義之徒義未審成康之刑措不用還
惑濛蔽之既舊毫厘之垂拱無為更疑淳素之先
往不拘以理數質文之再復何乎宜次以情機喜

表

為藤大納言譯右近衛大將表

臣氏宗言臣伏奉恩制得備宿衛光寵自天體
心無地臣誠惶誠恐頓首叩頭死罪死罪臣才非
文武智財股肱委假納言之名空盜大將之號一
以慙於過分一以耻於非據况半來榆景暮蘿柳
氣衰僅可信縉紳之臣何堪復降軒之列仍先再

墨兩点、および頭注がみられる。なお、第一巻には、
活字版用の雅味ある八行罫紙に淨書され、処々に、朱

精密な訓がほどこされている。

▽参考

道真の詩文集には、配流後の作品をおさめた「菅
家後集」一巻があり、「文草」「後集」とともに、そ
の成立の古さにかかわらず、よく原型を伝えている
といわれる。

築紫に終えたことは、一般の知る通りである。この間
前述のように、「三代実録」「類聚国史」などを編集
している。

一三、本朝統文粹

八一〇八・三▽

敷光朝臣初冬述懷詩一首

河陽樓宿越詩一首

羽觴

隨波賦

以同ムト洛因流汎酒為題

三月三日於船中而作之

首周公之卜城也瞻彼東洛建我西周開翠

躅千岸上鑿羽觴於波頭臨罷有心未能可

滌難穢會飲元美酒亦足降百憂原支豫遼

釋地歡宴傳風其說聞于東氏其義起自姬

公潭月繞浮平舉纖彩之岸花漫落口吹

慶長年間写

内題「本朝統文粹」

外題(題簽)同上

袋綴じ・灰色紙表紙

二九・八×二二縫

無界・八行

「御本」印記

鞋底之紅於是潔其心去六卜酌下若之餘
味臨中流而未福浮莫之躍似轉三雅於遠
近洛鳥和鳴棲呼四字於遲速余乃洞半頻
勸陶然自樂誠置酒之如淮遂取醉於曲洛
沙頰快歡熙任冷暖半風烟潭邊漫頃空侍
賓主之酬酢既而一同爰始二漢相因尋勝
趣于吉日待芳躅于嘉辰水是无情誰論淺
深之處浪其不定難知次第之巡況復十分

平安末期(一一四〇年ごろ)に成った漢詩文集。「統
本朝文粹」とも呼ばれる。編者については「本朝書籍
目録」に藤原季綱とあり、これが、通説のようになつ
てゐるが、いまだ、確認されるに至らない。内容は、
これよりおよそ一〇〇年以前(一一〇四年ごろ)、藤

本朝續文粹
三
六

本朝續文粹

五

本朝続文粹 第五冊表紙

法皇登靈以來銀漢之景瀕轉漸潤之駕不
歸指唯故宮之北開方棲別館之蕭索城南
愁深把覽穿之乎悲風起洛東氣冷樓閣重
々々愁雲橫是以排白河之輝密礼金仙之
尊像所諱者一無之妙與所叩者三下之供
鐘革藏八葉之風以西方為勝蓮臺九級之
露以上品為先伏望坐矣階下遠得往生真
中者謹奉作斯於如件

本朝続文粹 奥書

原明衡の撰に成る「本朝文粹」に續いて、約二三〇篇の詩文を分類・編集したもので、時代は平安後期一二〇年（後一条・崇徳天皇）にわたり、大江匡房・藤原敦光・藤原明衡ら四〇余人の作品がふくまれている。この時代の漢詩文は初・中期に比して低調におちいり、「本朝文粹」には質・量ともに及ばないが、文学的にはともかく、史料的価値は小さくない。

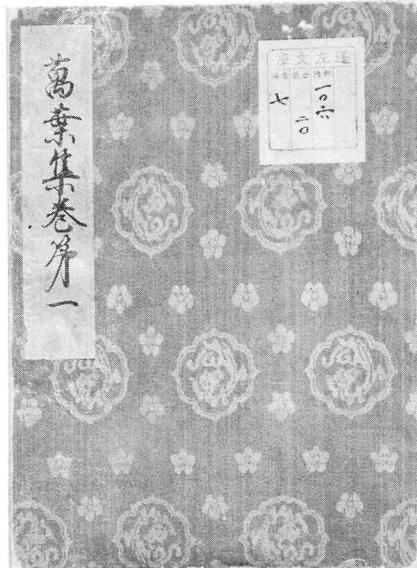
本書は、総じて古写本にとぼしく、内閣文庫の文永本（鎌倉中期写。重要文化財）などを除けば、近世の写本が多い。蓬左本は徳川義直旧蔵の慶長古写本で、なかなかの善本である。なお、この本は、はじめ一三冊にわかれていたが、のちに綴じ直されて、現在のような六冊本となつた。

▽参考 藤原季綱は平安末期の学者で、大学頭・文章博士（もんじょうはかせ）実範の子。三河・越前などの国司として地方をまわったのち、父と同じく大學頭に任せられたが、その伝はつまびらかでない。

一四、万葉集

八一〇六・七▽

〔足文元連
通書出時制
一〇六
七
言〕



江戸初期写

内題「万葉集 卷第一（一一〇）」

外題（題簽） 同 上

綴葉装・小豆色緞子表紙（花竜文）・見返し金箔

二三・六×一七・三縷

無界・八行・平がな附訓・朱点および朱注入り

奥書き

〔卷二〕 本云文永十年八月八日於鎌倉書写畢（下略）

製

大宰府人伴紳久見書付承歎一首
未若保持昌之承參教之筆城承呼不念
可也

太宰府人伴紳久見書付承歎一首

吾若尔參開有機花道有毛并毛毛

彼御本清輔朝臣点之云々（中略）

從三位行備中権守藤原重家

文永三年八月十八日

権律師仙覺

〔卷二十〕

先度書本云

斯本者肥後大進忠兼之書也（下略）

文永三年歲次丙寅八月廿三日

権律師仙覺記之

書写本云

應長元年十月廿五日以相傳說不殘秘訓授申源

幸公訖

陰蘿芝代王松之枝緒吹風赤土与路津葉分野佐々良
之光波

桑門寂印在判

皇太子奉御歌 明香文御天皇 路日天武天
禁裏歌 保母妻妹平子若名有夫人嬪破爾
音歌

音歌

紀曰天皇壬午十卯夏六月廿日從御前

生野千時天皇之御前主内臣久重七郎達

豆

明日香傳御原文奉書代 天皇中原人

本書は、いうまでもなく、上古から奈良時代までの作品四、五〇〇余首をおさめたわが国最古の総合的な大歌集で、その形式は、短歌・長歌・旋頭歌（せどうか。五七七五七七の三八音から成る民謡調の歌）など當時のあらゆる詩型を網羅し、内容は、相聞（そもそも

宮

藤原文淵堂春代

天良津舞歌

丁亥年
太上天皇

春色の夏本良と白い絹衣乾る乞番

色近に荒船叶柳が跡大入唐作歌

玉子灰面火山乃様原乃日冬月御せ從成

自阿德座師神事櫻木乃御徒嗣余奈所

食く平

天赤海保平在る丹々平山

平越或云通見御平越伊豆守令食寄

可天雞天乞難有石走淡國乃樂是久津
之赤天下乃食急天全之利口言神之
志は同等哉や天殿もへば君等共云春不度
生有萬立春日立春不度年不度身不度
磯城久名處見名也毛

及夫思母

万葉集・卷第一

ん。恋愛を詠つたもの)・挽歌(死をかなしみとむらうもの)・旅行・宴会・防人(さきもり)の歌など、バラエティに富み、作者は、皇族・貴族・僧侶・庶民など、広い階層にわたり、作品も、古代人の素朴・純真な情感が、おおらかな或いは莊重な調べでうたわれている。これらの点は、わが文学史上、古今を通じてほとんど類例がなく、くめども尽きない古典の泉といえる。のみならず、当時の生活・風俗・政治・社会などを、直接・間接に表現する史料となり、また古代語学上も重要な文献のひとつであって、その文化史的価値は、はかり知ることができない。ちなみに、中国では、ほぼ同時代に唐詩が栄え、和漢あいならんで、詩歌の黄金時代を示したのは壯觀である。

さて、本書の編者は、大伴家持(おおともノやかもち)七一八—七八五。万葉末期の代表的歌人)説が最も有力であるが、家持が単独で、一時に選んだわけではなく、何回かの暫定的編集を経たのち、晩年にいた

伊豆由伎新日半可俊御都三家布家布小
阿寒麻多周良武知波良波母余形作
一世奈波三遍美延農知波表意伎豆夜
多何久阿永和加利南

二云相叶毛

貧窮怨歌一首并短歌
乞雨布流歌乃雨難雪布流歌爲都母
奈冬寒之安礼坚塙平取都豆之温清渭

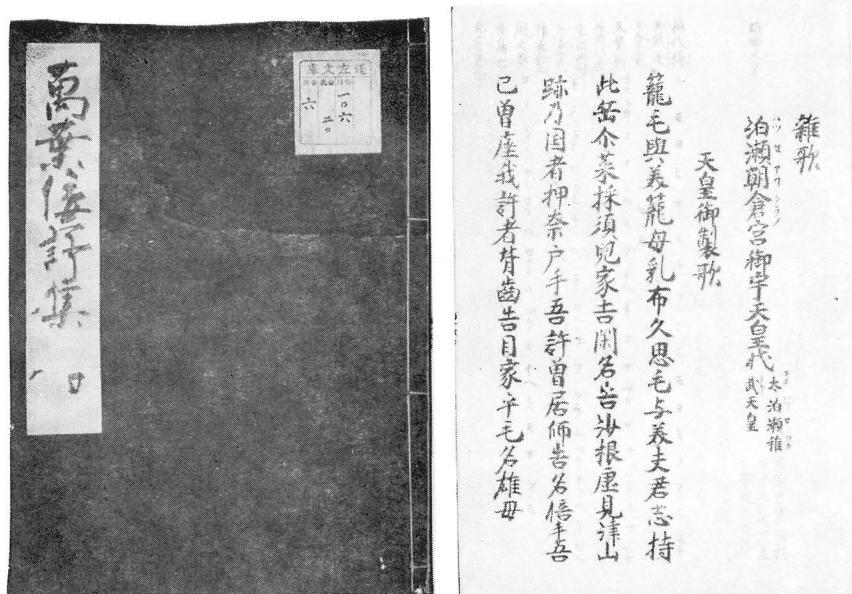
宇知復復是立之可夫可沽鼻曉之歌之余志可
參阿農治宜可仕無而安礼坚塙立人者安
良日著雷已呂倍膳寒之安礼婆麻被引可
賀布利布可多衣安里林許等其等伎曾
倍膳毛寒夜復良手和礼歌利母真人乃父
母波飢寒良手等改毛注良手此時者
伊可介之邦可汝代去和多流天地多流之

万葉集(片仮名付訓本)卷第五

つて二〇巻にまとめたと考えられている。これより先
き、すでに数種の歌集（「古歌集」、「柿本朝臣人麿歌
集」、「類聚歌林」など）の成立がみとめられてはいる
が、それらの原型は伝わらず、おおむね「万葉集」の
中にとけこみ、その大を成すに役立つたようである。

「万葉集」は、かな文字の発明以前なので「古事記」
同様、すべて漢字で記されている。漢字の音と訓との
複雑な組み合わせによる万葉がなは、よみかたがきわ
めて難かしく、平安の初期、早くも一般の手に負えな
くなつた。そこで、当時の歌人源順（前出の「倭名類
聚鈔」参照）・清原元輔ら、いわゆる梨壺の五人衆が
協力して、平がなの訓みをつけた。これが古点である

が、その原本は散逸して伝わらない。のち、平安後期
に「次点本」が現われ、これに属する古写本（有名な
桂本をはじめ、藍紙本・元暦校本など）を、いくつか
残しているが、いずれも欠本のみで、比較的、巻数の
多い元暦校本（東京国立博物館蔵・国宝）も凡そ三分



紙表
（題簽徳川光友筆）
卷第一
片仮名付訓本

本文庫には、ほかに、大形の江戸初期写本一部（二〇冊・袋綴じ・紺色紙表紙・無界七行・片カナ附訓・「張府内庫図書」印記・無奥書／一〇六・六〇）がある。題簽は尾張藩二世徳川光友（歴代藩主中、唯一の能書として知られる）の筆で「萬葉倭詩集一（一廿）」とある。

の一を失っている。鎌倉時代に入り、僧仙覚が、当時存在した諸本を校合し、片カナの訓を全作品に付けた。すなわち“新点”で、以後もっぱら、これが行われたが、古写の完本はやはり少く、西本願寺本や紀州家本（いすれも鎌倉末期）など、若干を伝えるにすぎない。蓬左本は、筆跡・装丁、ともに美しい江戸初期の写本で、卷一および卷二〇に、仙覚その他の奥書きをもつ新点本であるが、平がなの附訓がめずらしいとされている。印記がなく、伝来は明らかでない。

一五、古今和歌集

八一〇六・九▽

紀貫之・紀友則等編

二〇卷・一冊

室町末期頃写（伝三条西実澄筆）・貞應本

内題「古今和歌集」

外題（題簽）同上

綴葉装・茶色緞子表紙（果樹七宝文）・見返し金箔

一六・八×一二_縫

無界・一〇行・朱墨両点（序文）

仮名序（卷首）・真名序（卷尾）

奥書き

此集家々所称雖説々多（下略）

貞應二年七月廿二日癸亥（ママ） 戸部尚書藤

在判

「万葉集」の成立以後、かな文字の発明によつて、和歌はいよいよ盛んとなり、男性の表芸である漢詩文をしのぐにいたつた。「古今和歌集」（略して「古今集」とも）は、わが国最初の勅撰歌集で、延喜五年（九

此集中出禁裏御本為重卿
真筆書写之勘合數多証本似無其暇為座右之箴可助後昆之廢忘而已

文龜辛酉夏五十三日

亞槐拾遺

同十五十六両日読合了



古今和歌集卷第一

卷之三

あらそくまくらげの山

卷之三

年少喜樂一也

卷之三

卷之三

事あらう。まことに、

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

高麗文書

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

に雪はふりつつ（光孝天皇）

さて「古今集」の歌は、「万葉集」に比して、一般
理知的・技巧的にかたむき、感動性にとぼしいが、
文雅・繊細な佳作もすくなくない。

(○五) 醍醐天皇の命をうけて、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒（おおしこうちノみつね）壬生忠^{ミタラ}が編集にあたり、九一〇年ごろに成った。作者は一二〇余人、歌は凡そ一一〇〇首、部立て（分類）は春・夏・秋・冬・賀・離別・驛旅・恋・哀傷・雜などにわかれ、作品もほとんど短歌ばかり（少數の長歌および旋頭歌をふくむ）、かなと漢文と二つの序文を前後にもつなど、形式が整っていて、室町後代の「新続古今和歌集」に至る二一種の勅撰歌集（総称して「二十一代集」という）の規範をなしている。

白菊の花（凡河内躬恒）

白菊の花（凡河内躬恒）

に雪はふりつつ（光孝天皇）

前者は機知と技巧の、後者は典雅の作例といえる。

ともあれ、万葉・古今・新古今の三集は、和歌史上、三つのピークを示す古典である。

本書は伝本がたいへん多く、異本にも富むが、藤原定家の校訂した貞応二年（一二二三・鎌倉前期）奥書き本がひろく行われ、この蓬左本もその一種である。

本文庫には、ほかに、巻一一一〇のみを収めた古写本二種（室町時代写・貞応本）を所蔵する。



一六、拾遺和歌集

八一〇八・六二▽

二〇卷・一冊

文明二年写（東常縁筆）

内題「拾遺和歌集」

外題 同 上（伝冷泉為広筆）

綴葉装・萌黃地金欄表集（見返し、金地に松を描く）

二一・八×一四・七

無界・一〇行

奥書き

天福元年仲秋中旬以七旬有余之旨目重以愚本書之
八ヶ日終功為授鍾愛之孫姪也 翌日会読畢

此集世之所伝無指証本乃以數多旧本校合彼是取其要

猶非無不審（後略）

（藤原定家）

以京極黃門真筆本透写油紙本自或人所不慮相伝之即

以此本仮名仕被書更真名文字以下具写之又遂校合畢

宜准証本而已

拾遺和歌集卷第一

平
春
平
王生忠等

けらども許や三春新もとよすぞほこひよし

承平甲年中宮の聲——絶えずある

屏風の

紀文等々

春霞などよあれ萬葉丙年に下りこゆるうき

かすみよ

おをあく

昨暮の年どれも春霞もとろゆりやぢはり

冷泉院東宮よりおけ時未だてまち

きむねせしれい、源重之

春霞の自愛はまことまさの霞の立ち

延喜院時月洛洛屏風よ

素性は師

萬葉等を詠頌りまことにひよしのこそ

天麿清時香名よ 源煥

水をさうの春の名風よまだむじとむきのあ

那
那
那

平祐舉

春きて報ひ原の雪力をさうたる年力也

○卷があり、内容は、この方がすぐれている。

本書は「古今集」「後撰集」に続く勅撰集で、書名の「拾遺」は、前の両集にもれた作品を拾うという意味である。(以上の三集をあわせて「三代集」と呼ぶ)長徳—寛弘年間(九九五—一〇一)。藤原道長の時代)の成立と考えられるが、編者は、花山法皇あるいは藤原公任など、諸説があつて定まらず、体裁も整っていない。歌数は一三〇〇余首、作風は前の両集をふまえて、正統的な古今調がくずれゆく過程を示すものと評価されないが、「古今集」成立後およそ一〇〇年を経て、正統的な古今調がくずれゆく過程を示すものとして、和歌史上の意義は小さくない。なお、本書からおよそ五九〇首を抄出したとみられる「拾遺集抄」一〇卷があり、内容は、この方がすぐれている。

本書の伝本は、天福年間（鎌倉初期）に藤原定家が

校合したものの系統が多く、この天福本に、定家の子

一七、金葉和歌集

八一〇七・八八

為家から為相へ伝わったもの（第一種）と、定家が孫

女に授けたもの（第二種）とがある。この蓬左本は第

源俊頼編

江戸初期写（伝・阿野実顕筆）

一〇卷・一冊

内題「金葉和歌集」

題簽 同 上

綴葉装・紺色紙表紙・見返し金銀箔散らし

二四・三×一七・七^絆

無界・一〇行

奥書き

此金葉集一冊庶流阿野大納言実顕卿筆也一覽之間

加奥書返遣畢

安永五年三月十一日 太宰權帥 藤花押

（②）各一部がある。

（②）東常縁は美濃国郡上八幡の領主、室町中期の代表的な歌学者の一人で、古今伝授をもって知られる。

「古今和歌集」に始まる勅撰歌集の第五号。編者は



金葉歌集

小倉百人一首のうち「うかりける人を初瀬の山おろし
はげしかれとは祈らぬものを」で知られる源俊頼。天
治元年（一一二四・平安末期）白河法皇の命をうけて
から数年を経て成った。この間、たびたび手直しを命
ぜられ、三度目によく嘉納されたので、初度本・
二度本・三度本の三種がある。一般に流布したのは二
度本で、歌数（約六五〇首）が少いため、分類も、春
・夏・秋・冬・賀・別離・恋・雑と簡単である。本集
の特色は、先ず、平安後期の作品のみを集めたこと、
雑の部に、初めて連歌を加えたこと、内容的には、新
しい傾向のものを大胆にとり入れたことなどで、勅撰
集としては前代未聞といえる。したがって、当時の歌
壇に大きな論議をまきおこした。

本書の伝本は、東洋文庫・尊經閣・九州大学・吉田
幸一氏蔵本など、室町初期から江戸初期にかけての古
写本が多い。蓬左本は、装丁や筆跡などからみて、江
戸初期もかなり早いころのものと思われる。

詞苑和欽集卷第二

七

海河院時石首方魚去之重又

卷之三

水原志加義之海打屋子山浪子山

寶光寺藏經

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

通鑑

卷之三

影子 曾孫

春日勝原

余東坡春文と申けられ而首肯もて下

清江先生集

春日野子高きものアの松音の雪の月の夜の月

（後略）

「金葉集」の後、二五年を経て、仁平年間（一一五
一一五三）に成った勅撰集で、崇徳上皇の命をうけて
藤原顯輔が編んだもの。歌の数は四〇〇余首で「二十

奥書き

于時慶長七年小春上旬之比如本書々写之訖

袋綴じ・渡引き紙表紙

內題
詞花辭歌集

慶長七年写

藤原顯輔編

一八、詞花和歌集

「一代集」のうち、最も少い。編集の方法は「金葉集」にならっているが、比較的、新風にとぼしい。顕輔は源俊頼・藤原基俊の兩大家亡きあと、平安末期の歌壇をリードした人で、代表作に次ぎの一首がある。

秋風にたなびく雲の絶間よりもれいづる月のかげ

のさやけさ

本書は、内閣文庫・宮内省書陵部・静嘉堂文庫・東京大学・広島大学・清心女子大学・天理図書館・尊経閣などに鎌倉・室町時代の古写本があり、そのほか、猪熊氏・七海氏など個人の所蔵にも善本が少くない。

▽参考

①田安家は、歌人として名高い宗武（八代将軍吉宗

の次子）を祖とする徳川三卿のひとつである。

②本集より約三〇年の後「千載集」（藤原俊成編）

が出て「新古今集」につながる。「拾遺」「金葉」

「詞花」の三集は「古今」と「新古今」の二大歌集

の間にあり、過渡的な役目を果たすものといえる。

成立は平安後期とみられ、編者は、藤原公任説もある

一九、三十六人家集 ▲一〇六・三七▽

三六卷・三六冊

江戸初期写

外題（箱蓋）「三十六人家集」

綴葉装・無地紙表紙（青・橙・薄茶・灰色等）

金・銀泥で花鳥を描いた題簽紙に「人麿集」以下、

家集名を墨書き

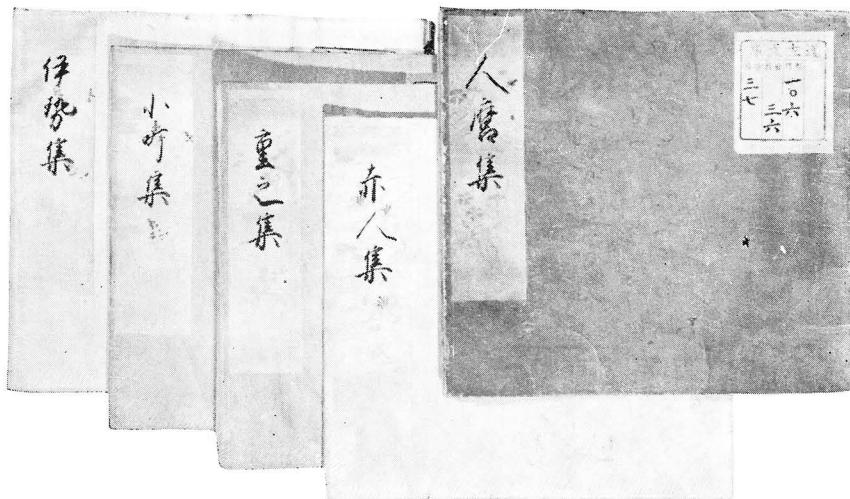
一六・五×一八縁内外

無界・一〇行

「張府内庫図書」印記

柿本人麿はじめ、万葉から古今・後撰集時代（平安前期）に至る三十六人（いわゆる三十六人歌仙）の家集（私家集、すなわち個人の歌集）をまとめたもの。

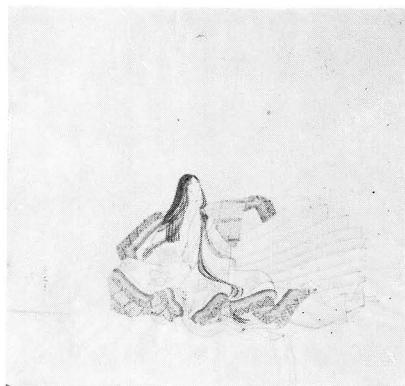
成立は平安後期とみられ、編者は、藤原公任説もある



三十六人家集の巻々



伊勢集



小大君集

が、明らかでない。本集は、内容に精粗の差が大きく、完全なものとはいえないが、平安中期以前の主な歌人の作品を多く集めているので、和歌および和歌史研究上、重要な資料となっている。

三十六歌仙の名はつぎの通りである。

人麿・赤人・猿丸・家持・業平・貫之・友則・躬恒・忠岑・忠見・順・敦忠・清正・元輔・兼輔・公忠・敏行・宗于・興風・是則・能宣・兼盛・朝忠・高光・頼基・重之・信明・元真・仲文・素性
遍昭・斎宮・小大君・小町・伊勢・中務

二一〇、和漢朗詠集

八一〇六・三八▽

藤原公任編

二卷・二冊

室町時代写（山崎宗鑑筆）

内題「和漢朗詠集卷上（下）」

外題「朗詠集上（下）」

綴葉装・うちぐもり表紙

二五・五×一七縞

無界・五一八行・訓点（朱・墨）付き

「尾府内庫図書」印記

本書は冊数が多いだけに、完全にそろった伝本は極めて少く、中に、西本願寺本（平安後期写・国宝）は抜群で、筆跡・装丁ともにすばらしい。次いで、女子大学本・宮内庁本・内閣文庫本・陽明文庫本（有欠）・神宮文庫本（有欠）など。この蓬左本も、有数の善本として、学界に知られている。

漢詩・漢文中の佳句およそ五八〇句と、これに対応する和歌二〇〇余首とをならべ載せて、朗詠（平安時代、儀式や宴遊などのとき、漢詩や和歌に節をつけて朗詠すること）の用としたもの。たとえば、

早春

水消三田地一芦錐短

春入二枝条一柳眼低

(唐・元稹)

先遣三和風二報三消息一 繼教三啼鳥二說三來由一

(唐・白居易)

氣霽風梳三新柳髮一 水消浪洗三旧苔髮一

(都良香)

(中略)

岩そそぐたるひのうへのさわらびの

もえいづる春になりにけるかな (志貴皇子)

山(谷)かぜにとくるこほりのひまごとに

うちいづる波や春のはつ花 (源當純)

みわたせば比良のたかねに雪きえて

わかなかつむべく野はなりにけり (平兼盛)

の類である。上巻は、春・夏・秋・冬に分類され、下

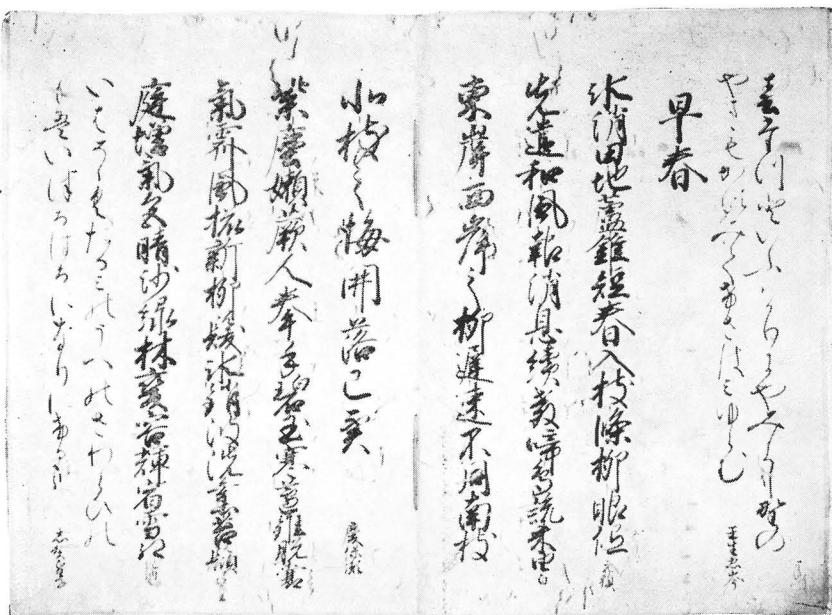
巻には「雜」を収めている。作品は、唐および平安前期の詩人と、万葉はじめ三代集の歌人から採ったものが多く、上代における和漢詩歌的一大集成といえる。編者は、王朝文化の中心人物のひとり藤原公任 (九六



六一一〇四一)で、長和—寛仁年間(一〇一三—一八)に成ったといわれる。

本集は、当初からひろくもてはやされたが、後世にあたえた影響も大きく、文学方面のみならず、朗詠という音楽的要素をもつことから、歌謡・舞曲などにまで及ぶ。また、平安時代以来、藤原行成などの名筆が多く残っているので、「古今集」の古筆とならんと書道史にも関係が深い。古写の伝本のうち、平安期のものに、皇室御物本(行成筆・公任筆その他)・陽明文庫本・名古屋閑戸家本など、鎌倉期のものに、京都国立博物館本・天理図書館本・大東急記念文庫本・毛利家本などがある。刊本では、近世初期のキリシタン版(古活字)がめずらしい。蓬左本は、俳諧の祖として名高い山崎宗鑑(室町中期)の筆に成るもので、朱墨両点をもつが、各詩歌の下に、作者名が記されていない。本文庫には、ほかに、伝二条為重筆の古写本(室町時代・二冊)一部がある。

和漢朗詠集(伝二条為重筆本)



二一、竹取物語

八一〇七・三七▽

一冊

慶長頃写

題簽「竹取物語」

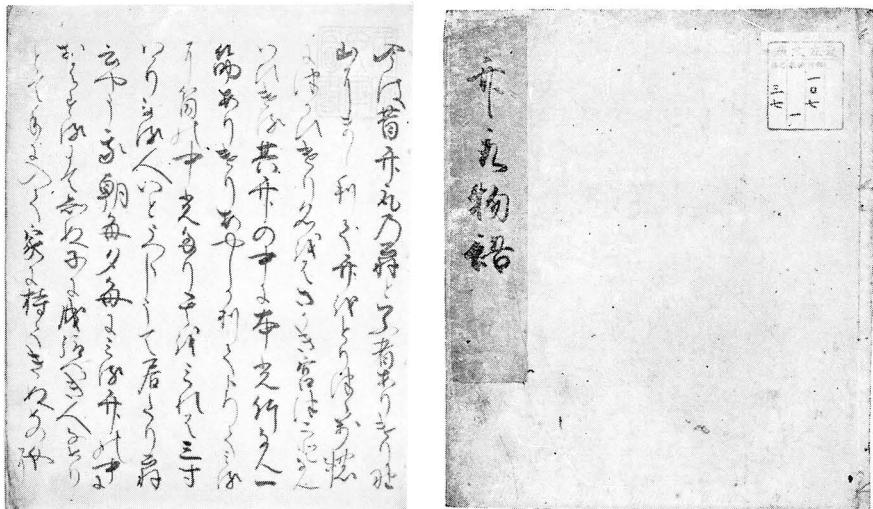
袋綴じ・橙色紙表紙

二五×二一・一葉

無界・一〇行

「尾府内庫図書」印記

「竹取の翁物語」あるいは「かぐや姫の物語」ともいう。九世紀の後半に成ったと考えられ、わが国最古の物語といわれる。一般にも、たいへん親しまれた作品であるが、単なるお伽話ではなく、和漢の伝説や民話などを豊富にとりいれ、伝奇的なストーリーのなかに、人情・世相諷刺・冒險・ユーモアなど、さまざま



な要素を織りこみ、素朴で簡潔な文章と相まって、かなもじ文学の先駆的名作となっている。一説に、未婚

の女子のため、社会や男性に対する心得を、文学のかたちで述べた物語ともいわれる。

作者については、源順や僧正遍昭（「経国集」の編著者良岑安世の子）などが挙げられるが、根拠はない。いずれにせよ、和漢の学術や世情に通じ、人生経験のゆたかな男性とみるのが妥当とされる。

本書の伝本はかなり多いが、中世以前の古いものはまれで、ほとんど室町末期以後に限られる。大別して古本系と流布本系とにわけられるが、多くは後者に属する。なかで、宝玲文庫（京都）本・天理図書館本・彰考館文庫（水戸）本・吉田幸一氏本・久曾神昇氏本、それに、この蓬左本などが、善本として知られています。刊本は、江戸初・中・末期にわたってたびたび出版され、慶長・元和の古活字本はじめ、正保・寛文・元禄・天明・寛政などの諸版がある。

二二一、伊勢物語

八一〇七・五九▽

一冊

室町時代写・武田本

題簽「伊勢物語」

綴葉装・青色紙表紙（雲母引き・金銀箔散らし）

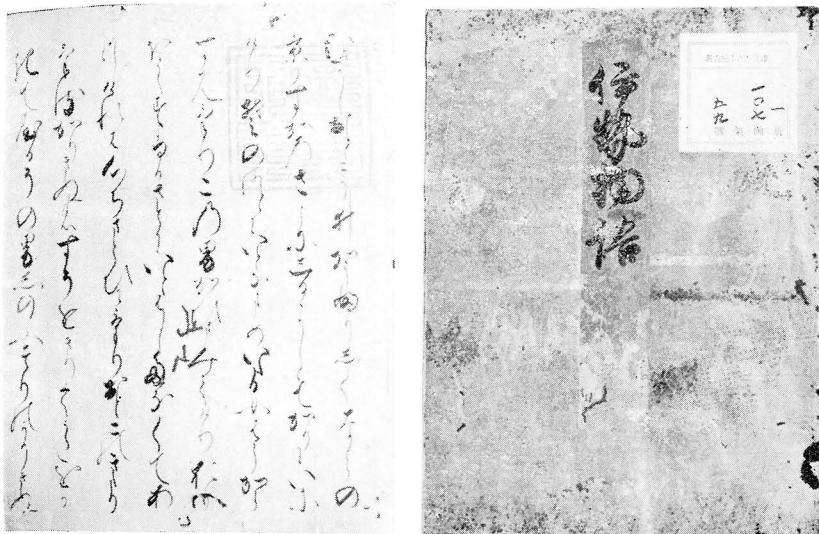
二四・二×一八・三^三

無界・八行

「尾陽内庫」印記

平安初期の歌人として名高い在原業平をモデルにした古い歌物語で「在五の物語」（在五とは、在原氏の五男の意）などとも呼ばれる。およそ二〇〇首の和歌を中心にして、「むかし、男ありけり」という書き出しにはじまる一二〇余のみじかい話を収めており、これより三、四〇年さきに出た「竹取物語」とともに、物語

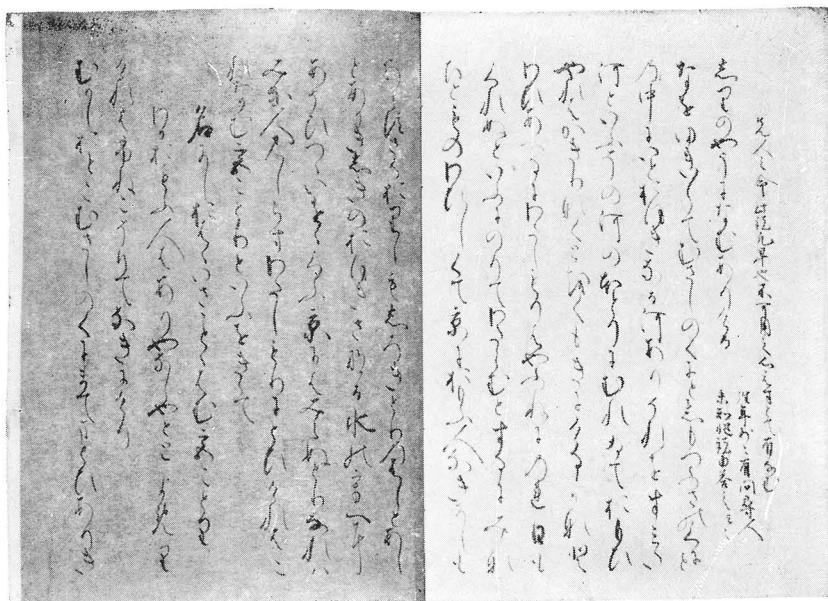
伊勢物語



文学の二つの祖型をなしている。すなわち、「竹取」が首尾一貫した伝奇的・叙事的作品であるのに対し、「伊勢」の方は、歌をもとにした抒情詩的な短編の集合ということで、いずれも、極初期のかな文学を代表しているわけである。

業平は、松風・村雨の伝説で有名な在原行平の弟にあたり、その行状はつまびらかでないが、藤原氏におさえられて志を得ず、その情熱を歌と恋と旅（？）とに注いだものである。この物語は、王朝風というよりは、むしろ、牧歌的要素に富み、総じて素朴・純粹な情感が哀調をもって流露し、まれに見る密度の高い作品となっている。わが古典のうち、もっともひろく読まれ、「源氏物語」その他、後世の文学に大きな影響をあたえた。

著者については、業平自身の原作を妻の伊勢が修補したという説が、古来、伝わっているが、明らかでない。業平の歌を素材にしつつ、いろいろな物語が付加



伊勢物語（五色料紙本）

されて、「古今集」成立の前後、何年かの間に、次第にその形を整えたものとするのが、現在の考え方である。

本書の伝本は、写本・刊本ともに、その数が多い。

異本もすくなくらず、朱雀院塗籠本・泉州本・定家本（さらに、流布本・天福本・武田本ハ若狭の武田家にあつたもの／などに分かれる）などがあるが、比較的みじかい作品なので、異本といつても、内容に大差はない。なお、本文庫には、掲出のもの（武田本）のほか、次ぎのように、八種の古写本がある。

- | | | | |
|-----------|-------|------------|--------|
| 伊勢物語（定家本） | 室町時代写 | 伝九条忠栄筆 | |
| 同 | 同 | 宗祇校本 | |
| 同 | 同 | （天福本）室町時代写 | 伝松木宗満筆 |
| 同 | 同 | （同） | 天正三年写 |
| （同） | 江戸初期写 | （朱注書入れあり） | |
| （武田本） | 室町時代写 | 小形本 | |
| （同） | 江戸初期写 | （五色料紙本） | |

一一三、土佐日記

八一〇七・三六▽

紀貫之著

一冊

江戸初期写

内題「土左日記」

題簽 同 上

綴葉装・紺色紙表紙

二四・五×一八・九縞

無界・八行・片カナまじり・朱点墨訓付き

「御本」印記

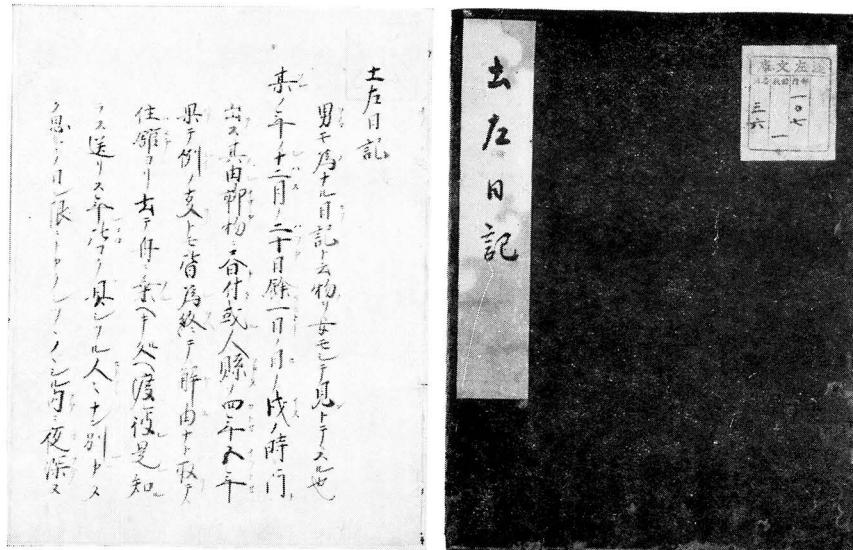
奥書き

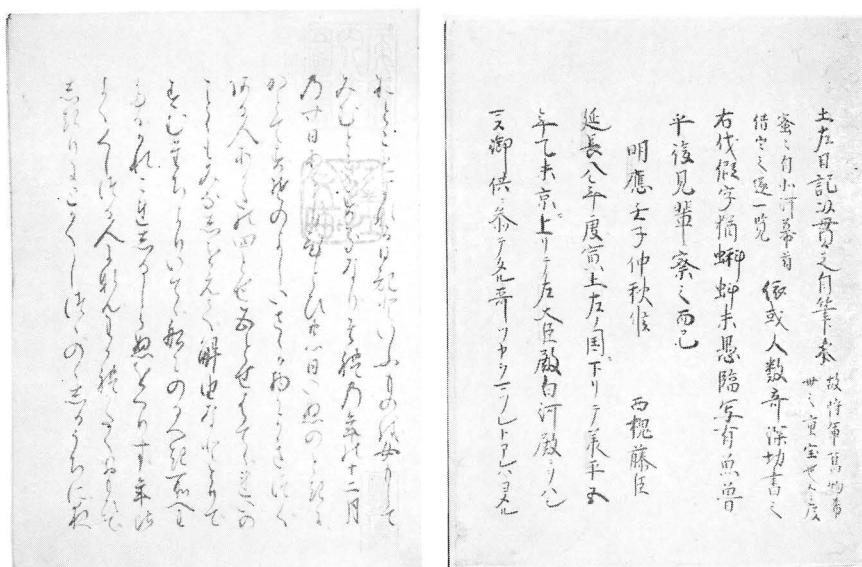
土左日記以貫之自筆本故將軍旧物希世之重宝也今度蜜々自小河幕府借出之遂一覽依住頃ナリ古テ丹青ノ下渡後是知
或人数奇深切書之右伐（代）仮字猶蝌蚪末愚臨写有

魚魯乎後見輩察之而已

明応壬子仲秋候

亞槐藤臣





神村本片

書奥ナ本カ片

延長八年庚寅土左ノ国ニ下リテ承平五年乙未京ニ
上リテ左大臣殿白河殿ニヲハシマス御供ニ参テタル
歌ツカウマツレトアレハヨメル
百程（草）ノ花ノ影マデ移ソツ音モカハラヌ白河
ノ水

右貫之集第六卷此歌有之此間六年也彼日記者非此
時歟

「とさノにき」と訓むのが正しいとされる。平安前期の代表的歌人紀貫之（八五九—九四五）が、土佐守の任を終わり、承平四年（九三四）十二月、土佐を發して、翌年二月、京都へ着くまで、およそ三ヶ月間の紀行。著者は女性をよそおいつつ筆をとっているが、いふがちとえり解せりやうとてじましりいとおのづかひとある。その内容は、旅中の見聞、むすめを任地で失った哀しみ、和歌に関することなどさまざまで、中には五〇余首の歌をふくんでいる。文学的にもすぐれて

いるが、著者の晩年の生活や当時の海上交通の状況などを具体的に示しており、史料としてもユニークな価値をもっている。

本書には異本が少くないが、貫之自筆本の写しが数種伝わっており、それらを校合することによって、原文の再現が可能と考えられている。現在の古写本は、

尊経閣本（藤原定家筆・国宝）はじめ、日本大学本・

宮内庁書陵部本・陽明文庫本・三条西家本など、相当にあるけれども、中世以前のものはすくない。蓬左本は、三条西家系統（奥書きの「亞槐藤臣」は実隆のこと）、亞槐は大納言、藤臣は藤原朝臣の意）の一本で片カナ書きを特色とする。本文庫には、ほかに、名古屋の国学者神村忠貞の旧蔵一部がある。（平がな本・「土左日記」・綴葉装・延宝七年△一六七九▽昌悦奥書き）

▽参考

土佐日記の“佐”は“左”と書くのが古例である。

二四、大和物語

八一〇七・一〇八

二冊

明応五年（一四九六）写
題簽「大倭物語上（下）」

袋綴じ・紺色紙表紙（金銀泥にて花鳥・山水を描く）
二五×一七・七縄

無界・一〇行・注双行
「御本」印記

跋（藤原定家）

寛喜三年八月十八日辛未（ママ）未時於北辺蓬屋
終書写之功閑居徒然之余也目盲手振不成字推量而
染筆許也

即校了当初書写物以無落字為一得耄及之後已落數
行書入之可恥可悲

奥書き

明応二年四月廿七日終書写之功訖件本以外荒本也
追可校

正二位権大納言藤原朝臣親長七十歳 在判

事の如く筆の力絶えずの弘葉殿
筆が如きに付されどす
やうな事の如きをもあらんにせよ
かきのむれりとそりとてまことに
とおゆる事す
なんぞおれ筆をかへりて筆をかへりて筆を
かへりてあらうかのいふ如きをもあらんにせよ
かきのむれりとそりとてまことに
とおゆる事す



一〇七

二



「大和物語」は、平安時代前期、一〇世紀の中ごろに出た歌物語集で、「伊勢物語」よりも数十年おくれている。話の数は、普通、一七三段といわれ、それらのほとんどが恋愛譚で、登場人物の多くが実名をもつて記されており、「伊勢」のように、業平らしい個性

この物かたり甘露寺権大納言 親長 七十歳 為秀速かきう
つきせ給ふしかるを山雪中の冷然におろかなる
筆を染侍りかの本一さつたれとも身つからの書写
の分かみ數あつしされはひらきかたしわたくしの
故寒として二帖にわかちぬさためて落字等おほか
るへし欠分あまたあり仍一校なを他見を恥者なり
明応五年十一月廿八日 左衛門尉為衆 花押

明應二年正月廿日
佐伊キノ元平と通之經

正行權大判官藤原親長

五夷

的な一人物を中心としたものではない。文学的価値は「伊勢」に及ばざること遠いが、当時の上流階級の裏面を、断片的ながら示しているし、また「伊勢」に始まる“歌物語”という文学形式の推移をうかがう作品として重要である。この物語の素材は「源氏物語」などにも、なにがしか採り入れられている。

著者は、源氏に属する中級の男子貴族らしいが、詳細は明らかでなく、書名も、「唐物語」ないし「伊勢物語」に対するもの、あるいは、作者を女房“大和”に擬するところから生じた説など、いろいろあるが、つまびらかにしがたい。

本書は、比較的、伝本にとぼしく、尊経閣旧蔵の伝藤原為家筆（鎌倉時代）本をはじめ、蓬左本（掲出のもののかに、神村忠貞旧蔵の江戸初期写本一冊がある）・宮内庁書陵部本などをかぞえる程度である。異本としては、鈴鹿氏本・勝命（藤原親重の法名）本などが注目されている。

明應二年正月廿日正行權大判官藤原親長

二五、空穂物語 △一〇七・三八▽

一〇卷・一〇冊

江戸初期写

題簽「としかけ」(俊蔭) 「藤原君」(忠) 「たゝこそ」

「梅のはなかさ」(花笠) 「(嵯峨) 「さかの院」(吹上) 「ふきあけ(上下)」

「まつりの夜」(田鶴) 「きくの宴」(藏) 「あて宮」(樓の上) 「はつ秋」(下)」

「たつのむら鳥」(藏) 「くわひらき(上中下)」

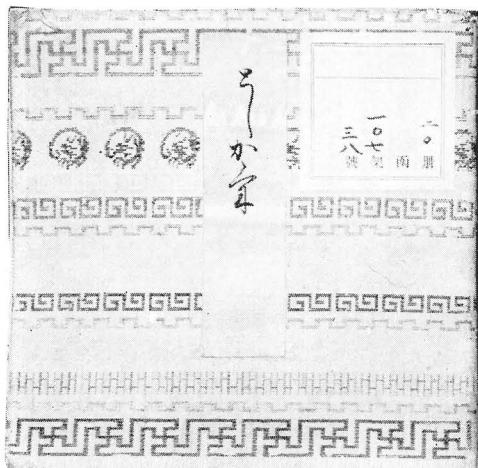
「国ゆずり(上中下)」(樓の上) 「るうのうへ(上下)」

綴葉装・薄茶地に卍・竜等を藍・茶・金などで横に織
り出した布表紙・見返し金箔

一六・二×一六・四縷(柿形本)

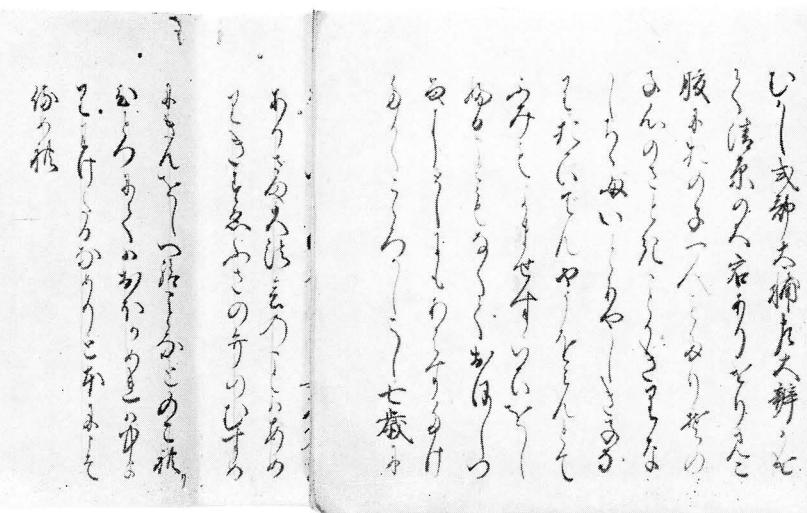
無界・一〇行・朱点入り

徳川新子(瑩珠院)旧藏



「うつぼ物語」「宇津（都）保物語」とも書く。

「伊勢物語」と「源氏物語」との中間（一〇世紀の



空 穂 物 語

あらわすあはるのこころあらわ
ときとよあさのすりひす
よしとよつてかことれ
おうかくのむりきゆ
ことわくからことれとも
ゆうね

「うつぼ物語」「宇津（都）保物語」とも書く。「伊勢物語」と「源氏物語」との中間（一〇世紀の末ごろ）に現れた作品で、和歌もいくつかまじえてはいるが、もはや“歌物語”的域を脱して、スケールの大きな散文物語（「源氏」以前では最大の長編）を形成している。ストーリーも複雑をきわめるが、大別して、「俊蔭」を主人公とし音楽（琴曲）に重きをおいた第一部、「あて宮」を中心とする求婚譚（ここには「竹取物語」の影響を見るが、筋の展開や人物の動きなどは、リアルに描かれる）、それに続く「はつ秋」から最終巻の「楼の上」にいたる貴族社会の描写、以上三部に分けられる。伝奇性と写実性とをあわせもち、音楽に関する著者の深い素養を示すなど、特色に富む大作であるが、他面、構想に破綻が多く、人物の肉付けが不足するなどの欠点もある。しかし、その長所は、業式部らによつて、十分に理解・繼承されたとみられる。

本書（作者不明）は、平安時代にはかなり読まれた

二二六、落窪物語

△一一一▽

らしいが、その後、あまり重視されず、そのため、信頼できる証本に欠け、研究をはばむ結果となつた。現

四冊

も国会図書館本・学習院大学本・天理図書館本・無窮会本などがあるが、おおむね、江戸初期以後に属する。

江戸中期写

題簽「おちくぼ物語 一（一四）」
内題 同 上

袋綴じ・藍色紙表紙

二九・二×二〇・七縁

無界・一二行

「尾府内庫図書」印記

蓬左本は、尾張藩三世徳川綱誠夫人新子（広幡氏）の
旧蔵で、全文に朱の句読点がほどこされ、また、所々
に、ふりがなや注が加えられている。

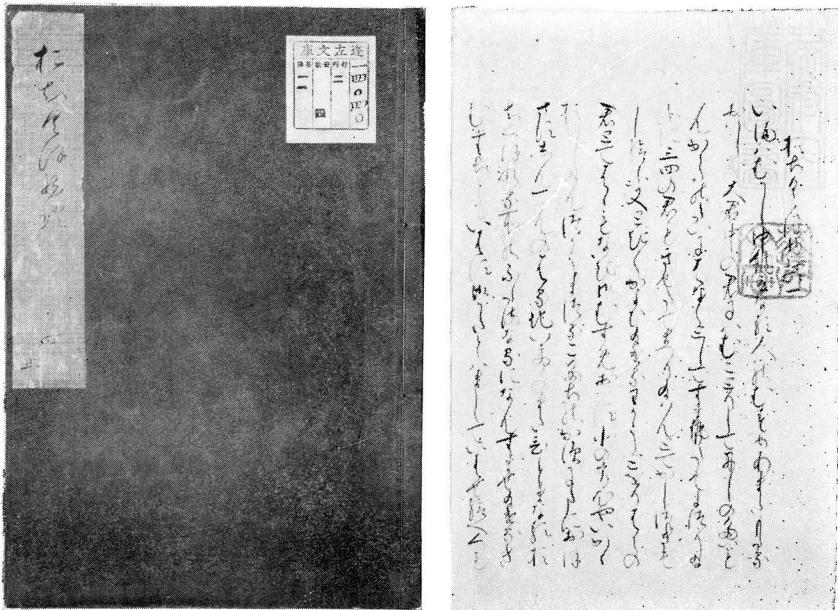
なお、刊本には、江戸初期の古活字版をはじめ、延

宝・文化・文政などの諸版がある。

▽参考

徳川新子は広幡忠幸の女で、尾張藩三世綱誠の正室。その旧蔵書には、ほかに「奈良絵本・つれづれ草」「しのびね」「岩清水物語」などがあり、いずれも本文庫に所蔵される。

一〇世紀の末ごろ（「空穂物語」よりはおそらく「源氏物語」よりは早く）に成った長編物語。才・色ともにすぐれた落窪の姫君をヒロインとし、継子なるが故にいろいろな迫害・虐待をうけるが、のちに、時めく高官の妻となって富貴をえ、継母を見返すというシ



物語くばちお

デレラ的なストーリーである。継子いじめという明確なテーマをもち、構成や筋のはこびなどに無理がなく、当時の社会的・家庭的欠陥などをおのずから描き出しており、また、現実的な庶民性をもふくむ点など、ユニークな作品として評価される。

本書の著者も、源順説が古くからとなえられたが、やはり、明らかでない。一般に、日本の物語は、古代はもちろん、中世にいたるまで、作者不明なのが普通で、「源氏物語」における槇式部のごときは、異例といえる。なお「竹取」以後「源氏」に至る物語の作者として、源順の名が多く伝わっている。必ずしも信じがたいが、平安前期におけるかれの文名の高さ（地位は低かつたが）がこれによつて知られる。

本書もまた、古写本にとほしく、九条家旧蔵本や東京教育大学本（いずれも室町時代）を除けば、おおむね、江戸初期以後に属する。刊本も、寛政版・天保版など、江戸末期のものが主となつてゐる。

一七、源氏物語

八一六四・八▽

紫式部著

五四卷・一二三冊

鎌倉時代写（寄り合い書き）・河内本

外題「光源氏第一 きりつば（一第卅七 ゆめのうきはし）」

大和綴じ・縹色紙表紙（金銀箔および芒^{ノギ}引き）

三一・八×二五・七縷

無界・一一行朱点入り

奥書き

正嘉二年五月六日以河州李部親行之本終一部書写

之功畢

越州刺史平 花押

重要文化財（書第一六五一号。昭和二九年三月指定）

さて、この名作も、式部の自筆本ははやく散逸し、

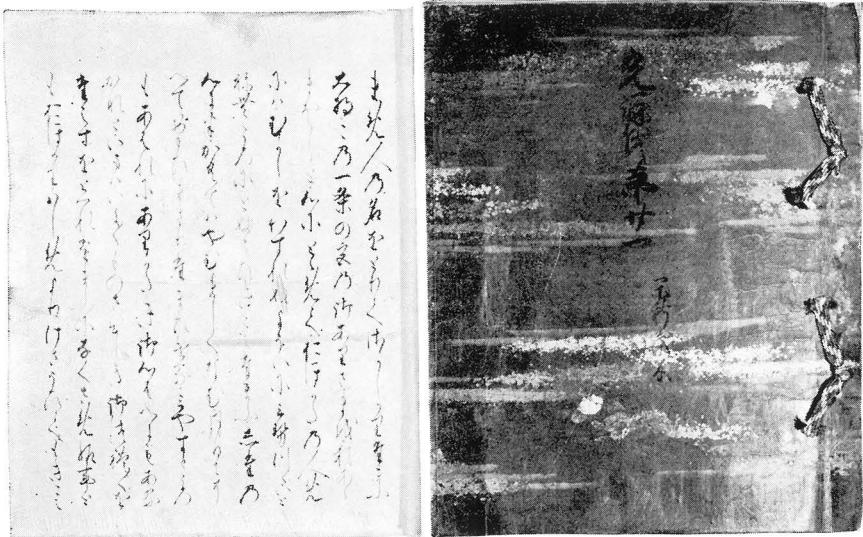
鎌倉時代に入るころには多くの異本を生じた。当時の代表的な歌人であり、かつ、古典の伝承者として有名な藤原定家は、「源氏物語」にも校を加え、元仁元年

「光源氏」「光源氏物語」「紫の物語」「紫のゆか

りの物語」などと呼ばれ、のちには漢文調で「源語」「紫文」とも称された。天才紫式部のライフ・ワークではあるが、式部以前にあらわれた多くの古典の成果を総合・集成し、さらに発展させた作品という意味でも、まさしく画期的であった。式部は、和漢の文学・史書・仏典などにひろく親しんだとみられるが、なかでも、「竹取」「伊勢」「空穂」「落窪」などの物語や「かげろふ日記」からは、大きな影響を、内容と形式の両方面において受けており、「源氏物語」は一日にして成らず、の感が深い。また、本書が藤原氏の最盛期にあらわれ、これ以後、王朝文学が藤原政権と歩みをひとしくして衰退することも、偶然とはいえない。

いはくのまゝ、其脚更れ重くも
うひよすよとてひじと手まゝり
いあらきく機くみよすと餘ありま
けのゆりよれにとむへあひきまく
持もくわくとくとく物もとくとく
たまおとせこく種うりトキうれ
くもくわくやくとくとくもくとく
ほくとくとくとくとくとくとく
うみをかづりとくとくとくとく
もくとくとくとくとくとくとくとく
うみをかづりとくとくとくとく

きりつば巻頭



ゆふぎり

かわぎ

(一一一四) のころ、一つの写本を作った。これが青表紙本系の祖本である。（ただし、ほとんど現存しない）ほぼ同じころから、河内守源光行も本書の校合を始めた。この事業は、光行の子親行（同じく河内守）にうけつがれ、建長七年（一二五二）に一応それが終わった。これが河内本の原本であるが、やはり、現存しない。たまたま、北条実時が、正嘉二年（一二五八・鎌倉中期）に、親行（奥書にいう河州李部／河州は河内守、李部は式部）の本を借りて、当時の能筆家十数名に分担書写させた。これがすなわち蓬左本（旧尾州家本）で、現存最古の河内本となっている。この本は、五四巻を二三冊に合綴し、各冊の表紙に「きりつぼ」以下の巻名が、一種ないし三種ずつ、かな書きされている。表紙の冊次は当初のもので、物語の巻次あるいは現在の冊数とも一致しない。（最後の「ゆめのうきはし」が『第卅七』とある）筆跡は後京極流や為家流を主とするが、やや後年の補写とみられる「さ

源氏第二 室山

内題簽

かき」「あかし」「たまかつら」など一二巻は、清水谷流が多い。全巻、本文には朱点（句読）がほどこされ、まま、かな文字の脇に、漢字を注記している。

この本は印記を欠くが、金沢文庫本に属することは実時自筆の奥書きによって明らかである。しかし、室町時代には足利氏の手に入り、桃山時代には豊臣秀次に所有された。（秀次は、古典や美術品の収集家であった）徳川氏に帰したのは、大坂陣のあとと考えられる。この間、近衛信尹（のぶただ。江戸初期の三筆のひとり）が筆者目録を作つて、本書に添えている。

なお、蓬左本に次ぐ古写の河内本としては、高松宮家本・平瀬本・七臺源氏などが名高い。本文庫には、このほか、各種の「源氏物語」があるので、以下、その書目を挙げる。

松風 鎌倉時代写（伝越部局筆） 緹葉装

（冊形本） 一冊

竹河 鎌倉時代写（伝藤原為家筆） 同一冊

総角 鎌倉時代写 緞葉装（枱形本）一冊

浮舟 鎌倉時代写（伝藤原為家筆） 緞葉装

（枱形本）一冊

源氏物語 室町時代写（伝伏見宮貞敦親王等寄合書） 青表紙本 緞葉装（枱形本）

五四冊 附・目録一軸

源氏物語 天正年間写（里村紹巴等寄合書）

青表紙本 天正八年紹巴奥書き 緞葉装

五四冊 附・光源氏系図 一冊

源氏物語 江戸初期写 青表紙本 朱点入り

（書き入れ多し） 袋綴じ 五四冊

源氏物語 江戸初期写（伝八宮良純親王筆）

青表紙本 緞葉装（小本） 五四冊

うきふね・かげろふ 万治三年刊 五色料紙

絵入り本 袋綴じ（横本） 合一冊

源氏物語 江戸中期刊 絵入り本 三〇冊

二八、今昔物語集

八一〇七・五四▽

江戸初期写
三一卷・二八冊

内題「今昔物語集卷第一（一巻第卅二）」

外題「今昔物語集一 天竺（卅一本朝付雜事）」

袋綴じ・浅黄色紙表紙

三〇×二二・四^禁

無界・八行・一五一七字（片カナまじり）

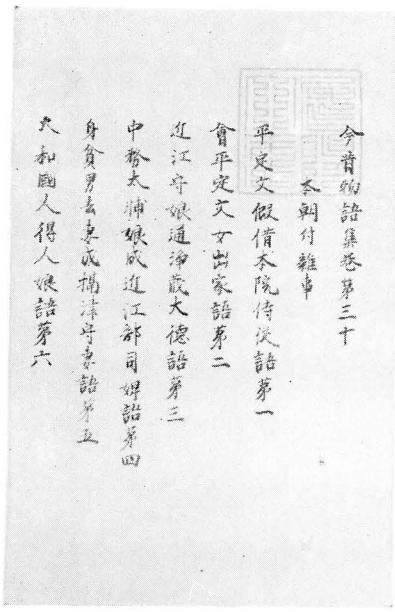
「尾陽内庫」印記

「宇治大納言物語」とも呼ばれるが、これと「今昔物語」とが、同一の書かどうかは明らかでない。

「今ハ昔——」に始まる短い説話およそ一二〇〇編を集めた大著で、平安末期の作と考えられている。王朝文学の精粹は「源氏物語」に集成され、その後「狭



今昔物語集



今昔物語集

今昔物語集卷第三十
本朝付雜事
平定文假借本院侍從詔第一
會平定文才出家詔第二
近江守娘通淨嚴大德詔第三
中裕太神娘成進江郡司婢詔第四
舟貧男去東城橘津守妻詔第五
久和飄人得人娘詔第六

「衣」などに余光を残しつつも、急速におとろえるが、かわって、新興の武士や庶民階級をバックに、それまでの優雅な宫廷物語とはことなる素材と文体とをもつて現われたのが本書である。全三一巻のうち、巻一一五が天竺（インド）、巻六一〇が震旦（シナ）、巻一一一以下が本朝で、内容は、仏陀の伝記や因果応報譚など仏教に関する説話、天狗や鬼などに関する怪異談、盜賊もの・孝子もの・恋愛ものその他いろいろの世俗的な話とに大別できる。登場人物・場所・事件など、きわめてバラエティに富み、平安後期の世相や人間像を、率直・新鮮なタッチでリアルに描いたものが多くの、長編小説を代表する「源氏物語」（「源氏」には短編的物語もふくまれるが）とならんで、世界的な短編集と目されている。本書の影響をうけて、鎌倉時代以後、「宇治拾遺物語」「古今著聞集」「沙石集」「新著聞集」などが出土したが、質・量ともに「今昔」に及ばない。近代にいたつて、芥川龍之介がこれに取材

毛非子ハ云フ甲斐元ノテ止ニナリ越テ

其ヨリ其ノ寺ノ鐘ハ元キ也此シ思フ

ニ稱ヘテ盜ニ事ハ馬ル者モ有十ム何

テカ然カ虚元ハシテ不動スニテ久ノハ

有ラム久何テ月後ハ心ニ往セテ後十ム

實ニ見ケルニ由元キ者モ皆悲カリケル

事也極カリテル奴原ノ檜ヘカナトナム

見聞ク人云ニ望テレ走シハ万ノ事シハ

現ト思エル事也ト云フトモ不見知サラ

ム者ノセム事ヲハ尚吉ク思ニ廻シテ可

製キ也トナム結リ侍ヘシトヤ

羅城門登上層見死人盜人若槻十八

金首楊津ノ國邊ヨリ盜セムカ為ニ京ニ

上ケル男ノ日ノ來タ明カリケルハ羅城

門ノ下ニ立隱シテ立テリケルニ未嘗ノ

方二人童ノ行ケハ人ノ靜ニシテト

し、独特の小説をいくつか制作した。「鼻」（巻二八・第二〇話）は出世作として名高く、「羅生（城）門」（巻二九・第一八話）は映画化されて、国際的にも好評をえた。ほかに「芋粥」などもある。

本書の著者は、源隆国（宇治大納言。一〇〇四—七

七）説が古くからとなえられてきた。いまは疑問とされ、作者が単独か複数かもつまびらかでない。伝本は

二八巻本（八・一一・二二の三巻は、早く失われた）

を最多とするが、その古写本はすくなく、近世のもの

をふくめても、内閣文庫本・東京大学本・東京教育大

学校本・九州大学本・日本大学本・実践女子大学本・関

西大学本・東洋文庫本・彰考館本・岩瀬文庫本など、

十余部にすぎない。鈴鹿氏本は、現存最古（鎌倉時代

写）の貴重書ながら、欠巻が多い。蓬左文庫本は江戸

初期の大形の精写本で、二八巻本としては、最も古いものの一つである。

二九、大鏡

八一〇七・二三▽

三卷・三冊

室町時代写

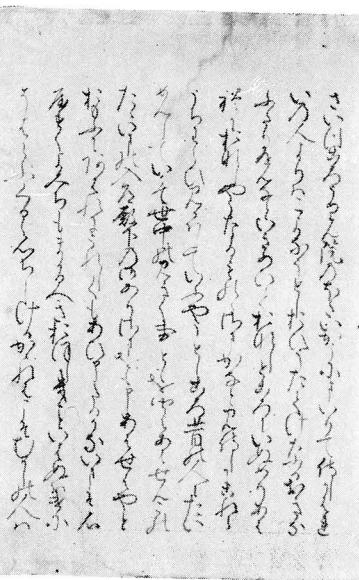
内題「世継」

外題（題簽）「世継物語 上（中・下）」

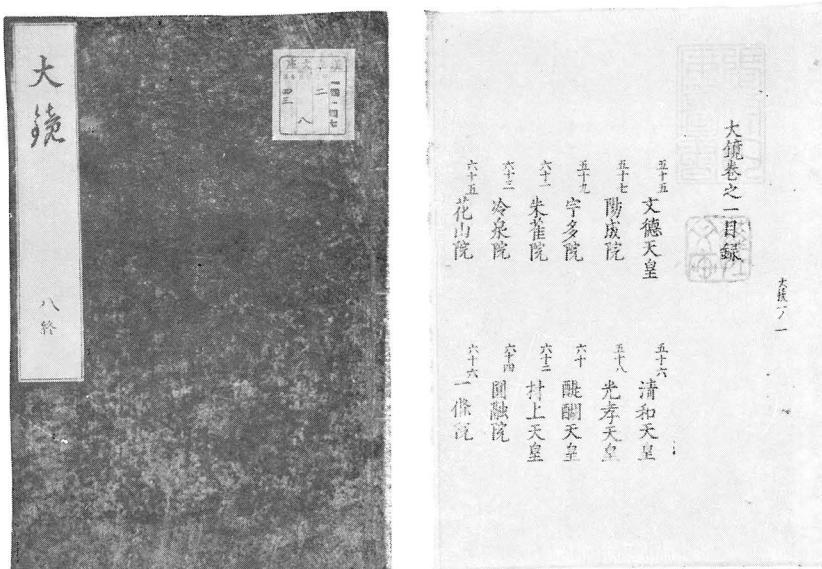
袋綴じ・黄褐色紙表紙（表紙に「文徳」以下）

二七・七×二〇・五縄

無界・一〇行



榮華物語とならび、和文で書かれた最古の歴史物語のひとつで、「世継」（よつぎ）また「世継物語」とも呼ばれ、大宅世継・夏山繁樹と名乗る二老人の対話形式になっている。文徳天皇の嘉祥三年（八五〇）から後一条天皇の万寿二年（一〇二五）まで、平安初中期およそ一八〇年間にわたるが、これは、藤原氏が



大 鏡 (江戸初期刊本)

政権を独占したのち、一門の間にも烈しい勢力争いを生じ、結局、御堂関白道長があらゆるライバルを倒して「この世をばわが世とぞ思ふ望月のかけたることもなしとおもへば」と自己満足をうたつたという時代に相当する。

本書の著者は明らかでないが、史眼のするどさや描写のいきいきと力強いことなど、「源氏物語」とは対照的な意味で、画期的な名作とされる。様式の面でも列伝体（人物の伝記を中心とした記述法で、天皇本紀・臣下列伝・昔物語の三部から成る）を用い、後世に与えた影響が非常に大きい。「今鏡」「水鏡」「増鏡」などの歴史物語は、いずれも、この「大鏡」を規範としている。

本書には、三巻・六巻・八巻などの諸本があり、伝本も多数にのぼるが、古写の完本は比較的すくない。戦後、名古屋で発見された東松（とうまつ）本は現存最古（鎌倉時代写・重文）といわれ、この蓬左本も、

それには次ぐ古写本として知られる。

▽参考

三〇、今 鏡

八一〇七・二六▽

①本文庫には、ほかに、八巻本の「大鏡」（江戸初

期刊・八冊）一部がある。野間三竹（一六〇八—七

六。京都の人。医を本業としたが、和漢の学に通じた文人）の旧蔵で、流布本のなかでは、版式のすぐれた善本である。

②「大鏡」をはじめとし「今鏡」「水鏡」「増鏡」

をあわせて「四鏡」というが、本文庫には「大鏡」と同筆・同装の姉妹本「四鏡」がそろっている。このうちの「増鏡」に、応永九年（一四〇二・室町初期）の奥書きがあるので、ひとしく応永本と呼ばれている。野間三竹旧蔵本にも、江戸初期刊本の「水鏡」及び「増鏡」がある。

③東松本は、後述の「河内本・源氏物語」に似た書風といわれ、発見された土地柄などから、尾州家の旧蔵とも考えられるが、確証はない。

室町時代写
一〇巻・一〇冊

内題「続世継 第一（一第十）」

外題（題簽）「続世継物語 一（一十）」

袋綴じ・黄褐色無地紙表紙

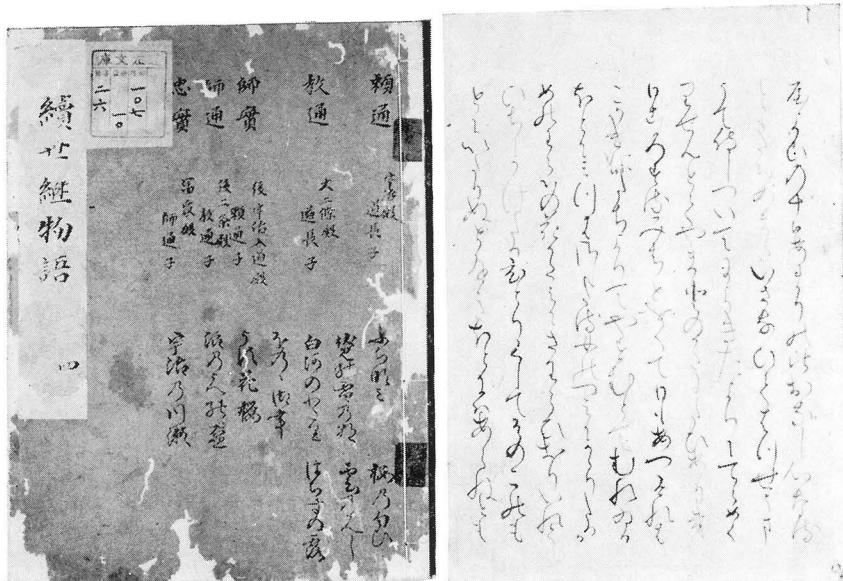
二六・八×二〇・六縞

無界・一〇行・平がな交り

「御本」印記

「今鏡」は「続世継」「小鏡」「つくも髪の物語」

など、いろいろな別名をもつが、それらが示すように「大鏡」（世継）に続く歴史物語である。すなわち、後一条天皇（平安中期）から高倉天皇（平安末期）にいたる、およそ、三代一五〇年の出来ごとを、優雅な



続世継物語（今鏡）

文章で物語風に述べたもの。形式は「大鏡」にならつてゐるが、内容的には、むしろ「栄華物語」に近く、没落期に入りかけた王朝貴族の情趣的な生活描写を主としているようである。本書の著者は、中山忠親と伝えられ、また、源通親説もあつたが、今は、寂超（藤原為経）と推定されている。成立は、序文によれば嘉応二年（一一七〇）で、平清盛の執政時代にあたり、すでに政権は武士の手に移つていた。

本書も、写本・刊本をあわせて、多くの伝本を存しているが、この「今鏡」は、前出の「大鏡」の姉妹本で、いわゆる「応永本四鏡」に属し、現存最古の畠山本（重文）などに次ぐ善本のひとつである。

▽参考

「栄華物語」にも「世継」という別名があつてまぎらわしいが、「世継」（よつぎ）とは、「歴史」を意味する和語である。また「鏡」とは、眞実を記して後世の「龜鑑」とする意味とされる。

昭和五十五年三月二十日印刷
昭和五十五年三月三十一日発行（訂正再版）

発編 行集 名古屋市蓬左文庫

名古屋市東区徳川町二の二七

印刷 大同印刷株式会社

名古屋市東区泉二丁目三一六

特定無料
五〇〇部

